

仙台市文化財調査報告書第 497 集

仙台平野の遺跡群 32

令和 3 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

南小泉遺跡第 90・91・92 次、
今泉遺跡第 16 次、宮崎遺跡第 2 次、富沢館跡第 19 次

2022 年 4 月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第 497 集

仙台平野の遺跡群 32

令和 3 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

南小泉遺跡第 90・91・92 次、
今泉遺跡第 16 次、宮崎遺跡第 2 次、富沢館跡第 19 次

2022 年 4 月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より11年が経ち、復興・創生期間6年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。このような中、仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、個人住宅建設に伴って令和2年度に発掘調査を実施した、南小泉遺跡第90・91・92次調査、今泉遺跡第16次調査、宮崎遺跡第2次調査、富沢館跡第19次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

令和4年4月

仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

例 言

1. 本書は、令和3年度個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書であり、南小泉遺跡第90・91・92次、今泉遺跡第16次、宮崎遺跡第2次、富沢館跡第19次の各発掘調査報告を合本にしたものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は木村恒が行った。
第1章・第7章—木村恒 第2章・第4章—及川謙作
第3章・第5章—柳澤楓 第6章—妹尾一樹 第7章—木村恒、及川謙作、柳澤楓
遺物の基礎整理—斎野裕彦、澤目雄大、柳澤楓、木村恒、向田文化財整理収蔵室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース—向田文化財整理収蔵室作業員
遺構註記表作成—各担当職員、向田文化財整理収蔵室作業員
遺物写真撮影・図版作成—向田文化財整理収蔵室作業員
遺構写真図版作成—各担当職員、向田文化財整理収蔵室作業員
3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文中の「～遺跡と周辺の遺跡」図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 第3章、第4章、第5章の平面図中に示した方位は概ねの方位である。
3. 図中の座標値は世界測地系を使用している。
4. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡・竪穴遺構 SK：土坑 P：ピット SX：性格不明遺構
5. 遺物の略称は以下の通りである。
A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非ロクロ調整） D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品
遺物観察表の数値で（ ）がついた数値は、図上復元した推定値である。
6. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
7. 遺構図に使用したトーンは以下の通りである。また、各図に必要な応じて凡例を付した。
 : 柱痕跡
8. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。
 : 黒色処理
9. 遺物写真の縮尺は遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。写真掲載のみの遺物は、3分の1で掲載している。

目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 南小泉遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第90次調査	3
第3節 第91次調査	9
第4節 第92次調査	14
第3章 今泉遺跡の調査	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 第16次調査	30
第4章 宮崎遺跡の調査	34
第1節 遺跡の概要	34
第2節 第2次調査	34
第5章 富沢館跡の調査	39
第1節 遺跡の概要	39
第2節 第19次調査	40
第6章 郡山遺跡の調査	43
第7章 総括	44

挿図目次

第1図 令和2～3年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	2	第13図 SI3 竪穴住居跡、SK3・6 土坑、 基本層出土遺物	22
第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡	3	第14図 今泉遺跡と周辺の遺跡	30
第3図 第90～92次調査区位置図	4	第15図 第16次調査区位置図	31
第4図 第90～92次調査区配置図	4	第16図 第16次調査区配置図	31
第5図 第90次調査区平面・断面図	5	第17図 第16次調査区平面・断面図	32
第6図 第90次調査出土遺物	6	第18図 今泉遺跡 検出堀跡位置図	33
第7図 第91次調査区平面・断面図	10	第19図 宮崎遺跡と周辺の遺跡	34
第8図 SI1 竪穴住居跡出土遺物	11	第20図 第2次調査区位置図	35
第9図 第92次調査区平面・断面図	16	第21図 第2次調査区配置図	35
第10図 SI1 竪穴住居跡出土遺物(1)	18	第22図 第2次調査区平面・断面図	36
第11図 SI1 竪穴住居跡出土遺物(2)	19	第23図 第2次調査出土遺物	37
第12図 SI2 竪穴住居跡出土遺物	20	第24図 富沢館跡と周辺の遺跡	39

第 25 図	第 19 次調査区位置図	40	第 28 図	富沢館跡 検出堀跡位置図	42
第 26 図	第 19 次調査区配置図	40	第 29 図	郡山遺跡調査区位置図	43
第 27 図	第 19 次調査区平面・断面図	41			

挿表目次

表 1	令和 2 年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	1
表 2	令和 3 年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	2
表 3	本書収録調査一覧	2
表 4	令和 3 年度 郡山遺跡発掘調査一覧	43

写真図版目次

写真図版 1	南小泉遺跡第 90 次調査 (1)	7
写真図版 2	南小泉遺跡第 90 次調査 (2)・出土遺物	8
写真図版 3	南小泉遺跡第 91 次調査 (1)	12
写真図版 4	南小泉遺跡第 91 次調査 (2)	13
写真図版 5	南小泉遺跡第 91 次調査出土遺物	14
写真図版 6	南小泉遺跡第 92 次調査 (1)	24
写真図版 7	南小泉遺跡第 92 次調査 (2)	25
写真図版 8	南小泉遺跡第 92 次調査 (3)	26
写真図版 9	南小泉遺跡第 92 次調査 (4)	27
写真図版 10	南小泉遺跡第 92 次調査出土遺物 (1)	28
写真図版 11	南小泉遺跡第 92 次調査出土遺物 (2)	29
写真図版 12	今泉遺跡第 16 次調査	33
写真図版 13	宮崎遺跡第 2 次調査 (1)	37
写真図版 14	宮崎遺跡第 2 次調査 (2)・出土遺物	38
写真図版 15	富沢館跡第 19 次調査	42

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和2年度

【文化財課】 課長 長島栄一
 【調査調整係】 係長 平間亮輔 主査 栗和田祥郎 近藤勇亮
 主任 及川謙作 小浦真彦 尾形隆寛
 主事 澤目雄大 妹尾一樹 相川ひとみ 柳澤 楓 木村 恒
 専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦
 【整備活用係】 係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 総括主任 高橋勝枝
 主任 堀越 研 佐藤文征 主事 庄子裕美 五十嵐 愛

令和3年度

【文化財課】 課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一
 【調査調整係】 係長 平間亮輔
 主査 及川謙作 近藤勇亮 菅原翔太 主任 堀江洋介
 主事 庄子裕美 澤目雄大 相川ひとみ 柳澤 楓 木村 恒 早川太陽
 専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦
 【整備活用係】 係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 小浦真彦
 主任 堀越 研 勝又 康 主事 五十嵐 愛 妹尾一樹
 専門員 荒井 格

第2節 調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、「個人専用住宅補助事業費」として、総額9,619千円(このうち補助金額対象 5,524千円)の予算で20件の調査を計画した。

第3節 調査実績

令和2年度から令和3年度(令和3年1月～令和3年12月)にかけて実施した調査は表1・2の通りで、合計29件である。本書に収録したのは令和2年6月～10月に実施した6件である(表3)。

表1 令和2年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (令和3年1月～3月)

図No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	R2-44	富沢館跡	太白区富沢字館	81.5	15.0	1月25日～26日	遺構、遺物なし	R2 101-359	—
2	R2-45	今市遺跡	宮城野区岩切字三所北	91.4	12.0	1月28日～29日	遺構、遺物僅少	R2 101-313	—
3	R2-46	山田上ノ台遺跡	太白区山田上ノ台町	52.2	12.0	2月2日～3日	遺構、遺物なし	R2 101-377	—
4	R2-49	栗遺跡	太白区西中田七丁目	97.4	24.0	2月24日～3月3日	性格不明遺構2、遺物多量	R2 101-378	次年度以降
5	R2-50	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	57.0	14.0	2月24日～25日	遺構、遺物なし	R2 101-419	郡山42
6	R2-51	富沢館跡	太白区富沢字館	65.9	12.0	3月4日	堀跡1、遺物なし	R2 101-389	—
7	R2-54	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	154.0	28.5	3月9日～10日	遺構、遺物なし	R2 101-402	郡山42
8	R2-55	館陰遺跡	泉区根白石字館蔭	75.8	9.0	3月10日	溝跡1、遺物なし	R2 101-429	—
9	R2-56	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	80.0	15.0	3月17日～19日	溝跡2、遺物僅少	R2 101-358	—

第3節 調査実績

表2 令和3年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (令和3年4月～12月)

図No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	R3-2	榎遺跡	青葉区上愛子字榎	72.5	9.0	4月12日	盛土内	R2 101 - 431	—
2	R3-3	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切字洞ノ口	61.3	15.0	4月14～16日	土坑2等、遺物少量	R2 101 - 434	—
3	R3-9	沖野城跡	若林区沖野3丁目	67.1	17.8	6月1日	遺構、遺物なし	R2 101 - 496	—
4	R3-10	西台窯跡	太白区西多賀3丁目	72.6	11.0	6月15日～18日 7月30日	瓦多量	R3 108 - 89	次年度以降
5	R3-11	山口遺跡	太白区	83.5	12.0	6月22日	ビット10、遺物なし	R3 108 - 80	—
6	R3-12	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切	82.8	15.0	7月5日	堀跡1、遺物僅少	R3 108 - 74	次年度以降
7	R3-16	今泉遺跡	若林区今泉2丁目	137.7	12.0	8月5日～6日	ビット4、遺物なし	R3 108 - 109	—
8	R3-21	羽黒堂遺跡	太白区山田本町	56.3	6.0	8月24日	遺構、遺物なし	R3 108 - 195	—
9	R3-22	羽黒堂遺跡	太白区山田本町	59.0	6.0	8月25日	ビット3、遺物なし	R3 108 - 183	—
10	R3-23	栗遺跡	太白区西中田7丁目	166.9	20.0	9月6日～9日	遺構なし、土師器	R3 108 - 143	—
11	R3-27	南小泉遺跡	若林区南小泉2丁目	55.5	6.0	10月5日～8日	溝跡1・ビット5、土師器	R3 108 - 204	—
12	R3-28	南小泉遺跡	若林区南小泉2丁目	55.5	6.0	10月5日～8日	小溝4・ビット3、土師器等	R3 108 - 205	—
13	R3-32	北目城跡	太白区東郡山2丁目	54.0	12.0	11月1日～8日	堀跡	R3 108 - 245	次年度以降
14	R3-33	北目城跡	太白区東郡山2丁目	54.8	12.0	11月9日～19日	堀跡	R3 108 - 246	次年度以降
15	R3-34	北目城跡	太白区東郡山2丁目	59.6	12.0	11月8日～19日	堀跡	R3 108 - 274	次年度以降
16	R3-35	北目城跡	太白区東郡山2丁目	59.6	12.0	11月8日～15日	堀跡	R3 108 - 275	次年度以降
17	R3-37	北目城跡	太白区東郡山2丁目	57.6	13.1	11月29日～ 12月2日	ビット	R3 108 - 276	—
18	R3-38	北目城跡	太白区東郡山2丁目	66.7	14.3	11月29日～ 12月2日	堀跡・ビット	R3 108 - 273	次年度以降
19	R3-39	北目城跡	太白区東郡山2丁目	66.7	13.1	11月30日～ 12月2日	井戸跡・ビット	R3 108 - 277	—
20	R3-41	陸奥国分寺跡隣接地	若林区木ノ下2丁目	56.5	2.9	12月9日	遺構、遺物なし(盛土内)	R3 108 - 313	—

表3 本書収録調査一覧

図No.	調査No.	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
—	R2-12	今泉遺跡	若林区今泉2丁目	75.8	15.0	6月2～3日	堀跡1、溝跡1、遺物少量	R2 101 - 58	第16次
—	R2-16	富沢館跡	太白区富沢字館	59.8	12.0	7月7～8日	堀跡1、溝跡1、ビット1、 遺物少量	R2 101 - 14	第19次
—	R2-24	宮崎遺跡	太白区富沢駅西	79.3	15.0	9月15～16日	竪穴遺構、土師器	R2 101 - 139	第2次
—	R2-25	南小泉遺跡	若林区一本杉町	39.7	15.0	10月6日～14日	掘立柱建物跡、溝跡1、土 坑1、ビット9、土師器、須 恵器	R2 101 - 177	第90次
—	R2-26	南小泉遺跡	若林区一本杉町	39.7	16.5	9月29日～10月6日	竪穴住居1、溝跡1、ビット 1、土師器、須恵器	R2 101 - 178	第91次
—	R2-27	南小泉遺跡	若林区一本杉町	59.6	20.2	9月28日～ 10月14日	竪穴住居3、土坑8、ビット 4、土師器、須恵器、陶器、 磁器など	R2 101 - 190	第92次



第1図 令和2～3年度 調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)

第2章 南小泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

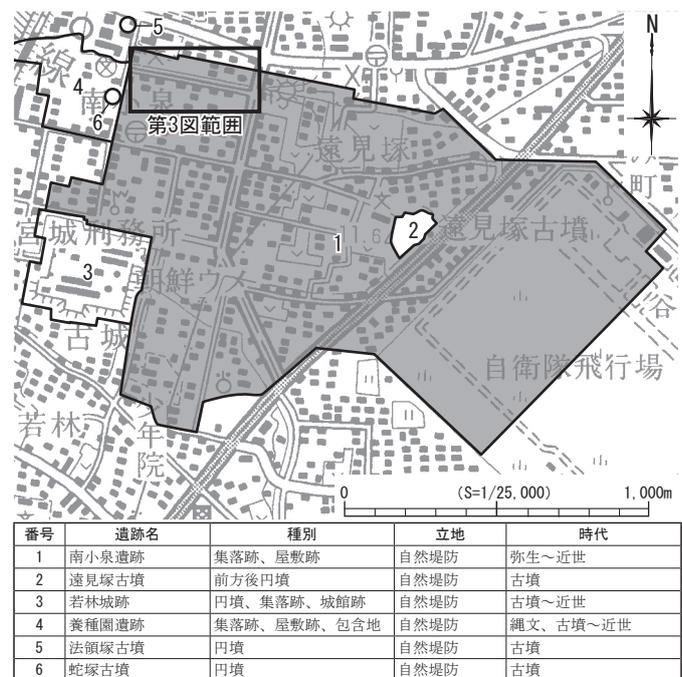
南小泉遺跡は、仙台市東部の若林区南小泉、古城、遠見塚、霞目に所在する。JR 仙台駅から南東約 3.5 km の地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約 3 km の場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の標高約 7～14m の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約 2 km、南北約 1 km に及んでおり、仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。

遺跡内には遠見塚古墳が存在し、また西部は若林城跡、北西部で養種園遺跡と接している。周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布している。本遺跡ではこれまでに 89 回の調査が実施されており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に古墳時代中期に関しては、東北地方南部の土器様式である「南小泉式」の標識遺跡となっている。これまでの調査で古墳時代から古代を中心に多数の竪穴住居跡が検出されており、仙台平野において有数の集落であったものと考えられている。

第2節 第90次調査

1. 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01021)
調査地点	仙台市若林区一本杉町 23 番 40 の一部 (C 区画)
調査期間	令和 2 年 10 月 6 日～14 日
調査対象面積	39.74 m ² (敷地面積 81.22 m ²)
調査面積	16.43 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主査 近藤勇亮 主任 及川謙作



第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和 2 年 8 月 12 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和 2 年 8 月 13 日付 R2 教生文第 101-177 号で通知)に基づき実施した。

調査地点は遺跡の北西側に位置する。調査区は対象地内に東西 5.0m × 南北 3.0m の規模で設定した。重機により I・II 層を除去し、III 層上面 (GL-0.55m) で遺構検出作業を行い、溝跡 1 条、掘立柱建物跡 1 棟、ピット 11 基を検出した。遺物は I～III 層上面および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器などが出土した。

調査に先立ち近隣の基準点 (QE51GS02・2 級 BS 座標: 10E33・3 級) から座標の移設を行った。遺構の記録は、平面図、調査区北壁、東壁、および各遺構の土層断面図 (S=1/20) を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



第3図 第90～92次調査区位置図

3. 基本層序

第90～92次調査の基本層は共通しており、厚さ0～35cmの盛土層の下層から大別で4層、細別で6層確認された。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは約0.55mである。

I a 層：10YR3/4 暗褐色シルト層。旧耕作土で層厚は約0～30cmである。

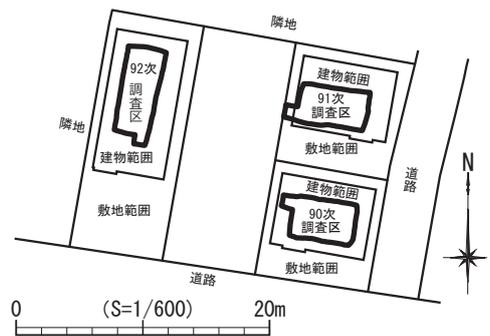
I b 層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層。層厚は約0～14cmである。

I c 層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト層。旧耕作土で炭化粒（φ5mm）が少量混じる。層厚は約0～6cmである。

Ⅱ 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト層。旧耕作土で、Ⅲ層ブロックを下層との境に斑状に含む。炭化粒を少量含む。層厚は約18～35cmである。

Ⅲ 層：10YR4/6 褐色粘土質シルト層。ほぼ均質な層である。層厚は約1.15mと推定される。

Ⅳ 層：10YR2/3 黒褐色粘土層。ほぼ均質な層である。第91次調査区でのみ確認された。層厚は約10cm以上である。



第4図 第90～92次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

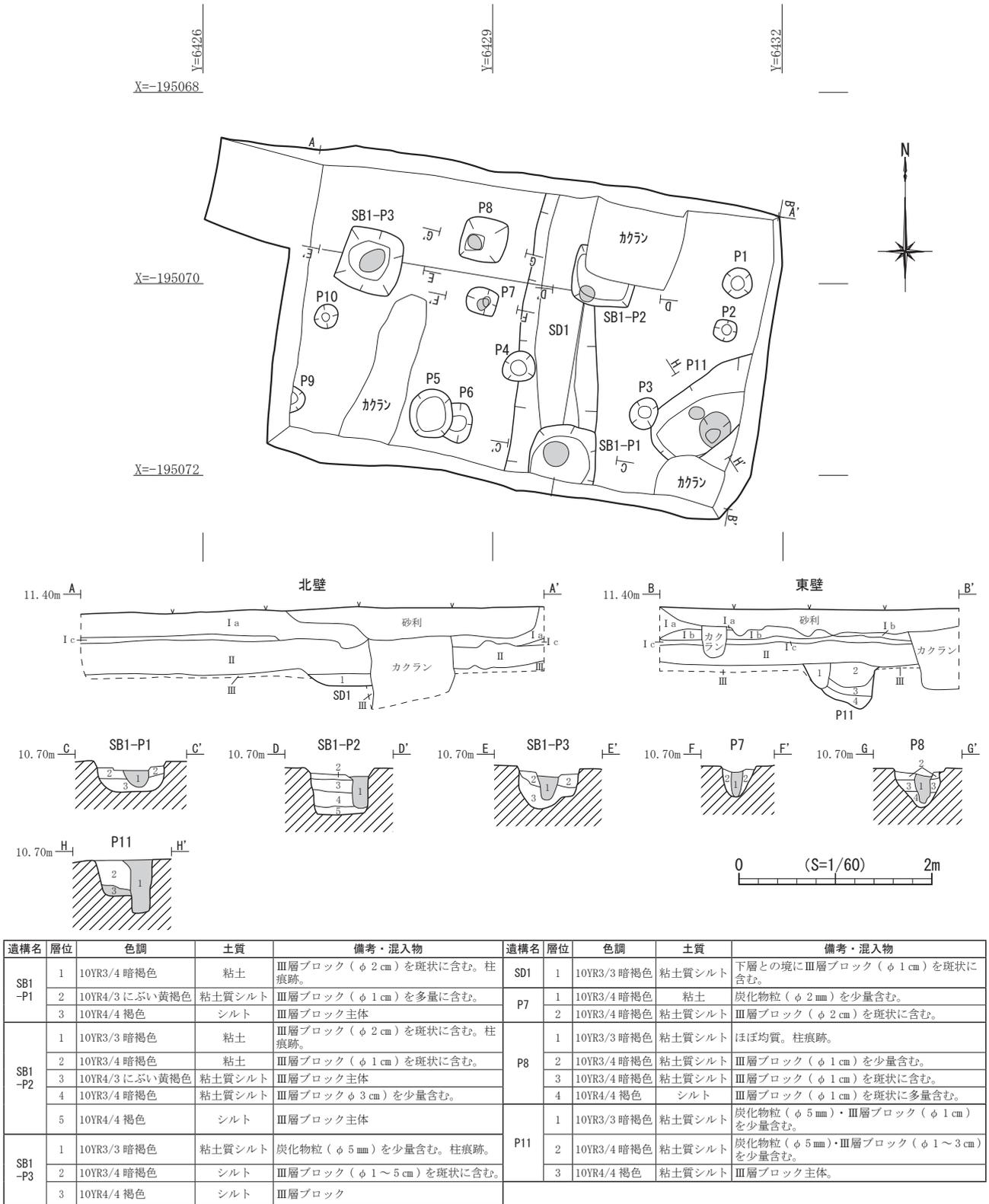
調査では、溝跡1条、掘立柱建物跡1棟、ピット11基を確認した。遺物はⅠ～Ⅲ層上面、および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器などが出土した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡（第5図）

調査区の中央部で検出された。SB1 掘立柱建物跡と重複しこれよりも古い。検出長は約2.9mで、幅は約72～85cm、検出面からの深さは約8～15cmで、方向はN-9°-Eである。堆積土は黒褐色の粘土質シルトである。検出された位置、規模および方向から第91次調査区で検出されたSD1 溝跡と同一の遺構であると考えられる。

遺物は出土していない。第91次調査区では7世紀末頃と推定されるSI1 竪穴住居跡よりも新しいことからそれ以降の時期に比定される。



第5図 第90次調査区平面・断面図

(2) 掘立柱建物跡

SB1 掘立柱建物跡 (第5図)

調査区の中央部から西側にかけて検出された。SD1 溝跡と重複し、これよりも新しい。SB1-P1 ~ 3 の3基が確認されたが、調査区の南側と西側にさらに延びる。方向はP1-P2がN-9°-Eである。

SB1-P1 ~ 3 は、平面形状が一辺約60~69cmの隅丸方形を呈し、堀方中央もしくは南辺付近に直径約15~20

cmの柱痕跡が検出された。遺構検出面からの深さは約35～45cmである。堀方埋土にはいずれも基本層Ⅲ層ブロックが混入する。柱間寸法は南北1.67m、東西2.26mである。

遺物は土師器片などが出土している。遺構の時期については7世紀末以降と比定されるSD1溝跡よりも新しいことから7世紀末以降であると推測される。

(3) ピット

P1～10 (第5図)

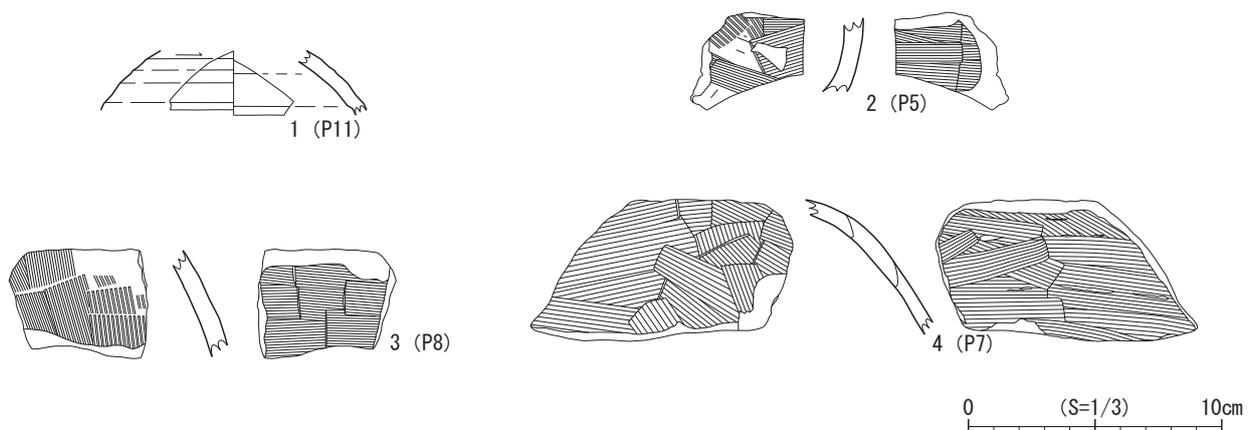
P1～6・9・10は、平面形状は円形を呈し、規模は直径約23～50cm、深さは約10～40cmである。堆積土は10YR4/3にぶい黄褐色の単層で、基本層Ⅲ層ブロックを斑状に含む。P7・8は、平面形状は隅丸方形を呈し、堀方中央に直径約11～15cmの柱痕跡が検出された。規模は一辺28～47cm、深さ40cmで、堀方埋土は10YR3/4暗褐色粘土質シルトに炭化粒が混入する層と、Ⅲ層ブロックを含む層がある。遺物は土師器の甕の破片などが出土している。

P11 (第5図)

調査区の南東隅で検出された。P3と重複しこれよりも古い。平面形状は隅丸長方形を呈するものと推定される。検出された規模は長軸138cm以上、短軸約67cmで、調査区の東側にさらに広がる。方向はE-36°-Nである。遺構の中央部の南側に直径約32～37cmの柱痕跡が、底面北側からは直径約13～17cmの柱痕跡が隣接して検出された。堀方の深さは約28～48cmである。当初は土坑と推定されたが、遺構の中央から柱痕跡が2基検出されたことから、ピットに変更した。遺物は土師器片や須恵器などが出土している。

(4) 出土遺物

各遺構から土師器および須恵器が出土し、今回はそのうち須恵器の蓋を1点、土師器の甕を3点図化した。第6図1の須恵器の全体の形状は不明だが、口径は比較的小型であると推測され、また立ち上がり急であることから、7世紀中葉から後葉の時期と考えられる。第6図2～4は土師器の甕と推測される。いずれも非ロクロ成型で、外面にハケ目もしくはハケ調整後にヘラナデが、内面にはいずれもヘラナデ調整が施されている。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-1	P11	-	須恵器	蓋	-	-	-	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	2-7-1
2	C-1	P5	-	土師器	甕	-	-	-	ハケメ・ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 橙色を呈する	2-7-2
3	C-3	P8	-	土師器	甕	-	-	-	ハケメ	ヘラナデ	胎土緻密 (体部破片) 橙色を呈する	2-7-4
4	C-2	P7	2	土師器	甕	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	2-7-3

第6図 第90次調査区出土遺物



1. SB1 掘立柱建物跡検出状況（西から）



2. SB1-P1 土層断面（北から）



3. SB1-P2 土層断面（北から）



4. SB1-P3 土層断面（北から）



5. P7 土層断面（北から）

写真図版1 南小泉遺跡第90次調査(1)



1. P8 土層断面（北から）



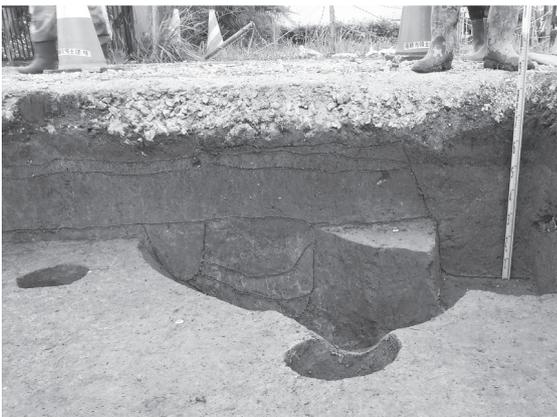
2. P11 土層断面（西から）



3. 調査区全景遺構完掘状況（西から）



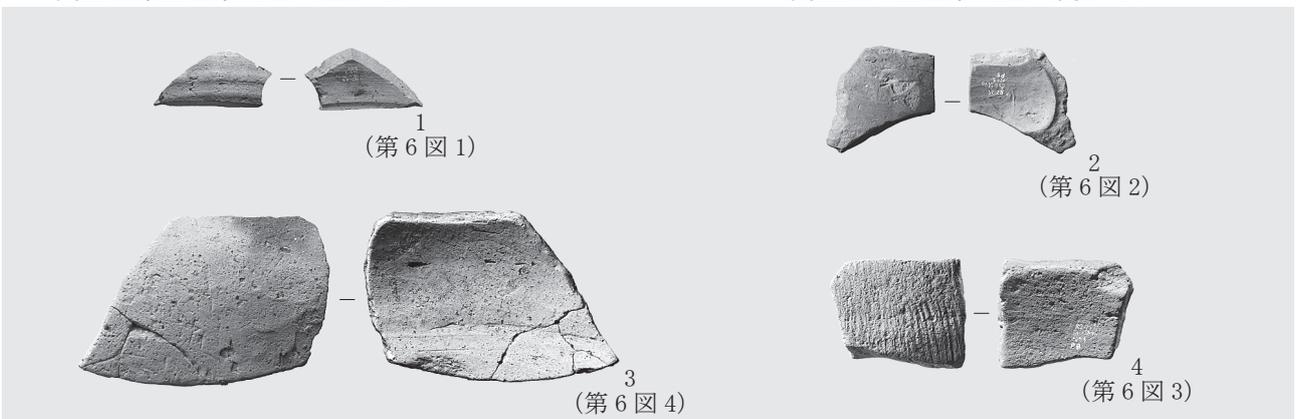
4. 調査区全景遺構完掘状況（東から）



5. 調査区東壁土層断面（西から）



6. 調査区北壁土層断面（南から）



7. 出土遺物

第3節 第91次調査

1. 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01021)	調査原因	個人住宅建築工事
調査地点	仙台市若林区一本杉町 23 番 40 の 一部 (D区画)	調査主体	仙台市教育委員会
調査期間	令和2年9月29日～10月6日	調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
調査対象面積	39.74 m ² (敷地面積 81.22 m ²)	担当職員	主査 近藤勇亮 主任 及川謙作 主事 柳澤 楓
調査面積	16.50 m ²		

2. 調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は令和2年8月12日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和2年8月13日付 R2 教生文第 101-178 号で通知)に基づき実施した。

調査地点は遺跡の北西側に位置する。調査では対象地内に東西 4.0m × 南北 3.0m の調査区を設定し掘削を行ったところ、調査区の西側に遺構が広がることが確認されたことから、最終的に東西の幅を 5.5m まで拡張して掘削を行った。重機により I・II 層を除去し、III 層上面で遺構検出作業を行い、溝跡 1 条、竪穴住居跡 1 軒、ピット 1 基を検出し、遺物は I～II 層中、および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器などが出土した。

遺構の記録は、調査区平面図および調査区西壁土層断面図 (S=1/20) を作製し、デジタルカメラにより写真撮影を行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 発見遺構と出土遺物

調査では、溝跡 1 条、竪穴住居跡 1 軒、ピット 1 基を検出した。遺物は I～III 層上面、および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器などが出土した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第7図)

調査区の中央部で検出された。SI1 竪穴住居跡と重複しこれよりも新しい。検出長は約 2.7m で、幅は約 57～66cm、検出面からの深さは約 25cm で、方位は N-4～6° -E である。堆積土は粘土質シルトで 2 層に細分される。検出された位置、方位および規模から第 90 次調査区で検出された SD1 溝跡と同一の遺構であると考えられる。

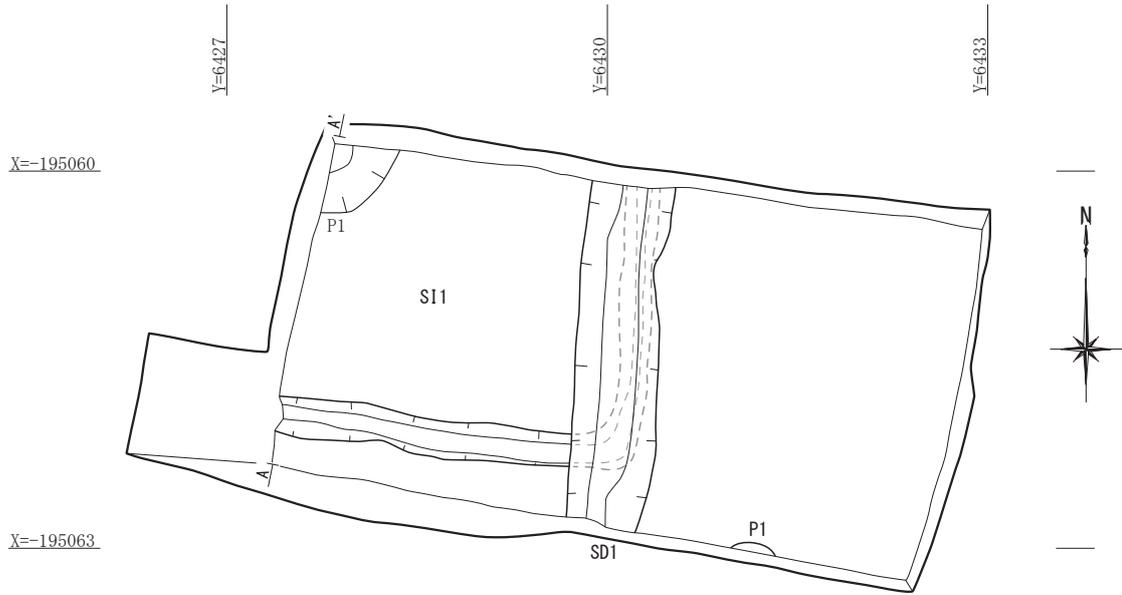
遺物は出土していない。7 世紀末頃に比定される SI1 竪穴住居跡よりも新しいことからそれ以降の時期に比定される。

(2) 竪穴住居跡

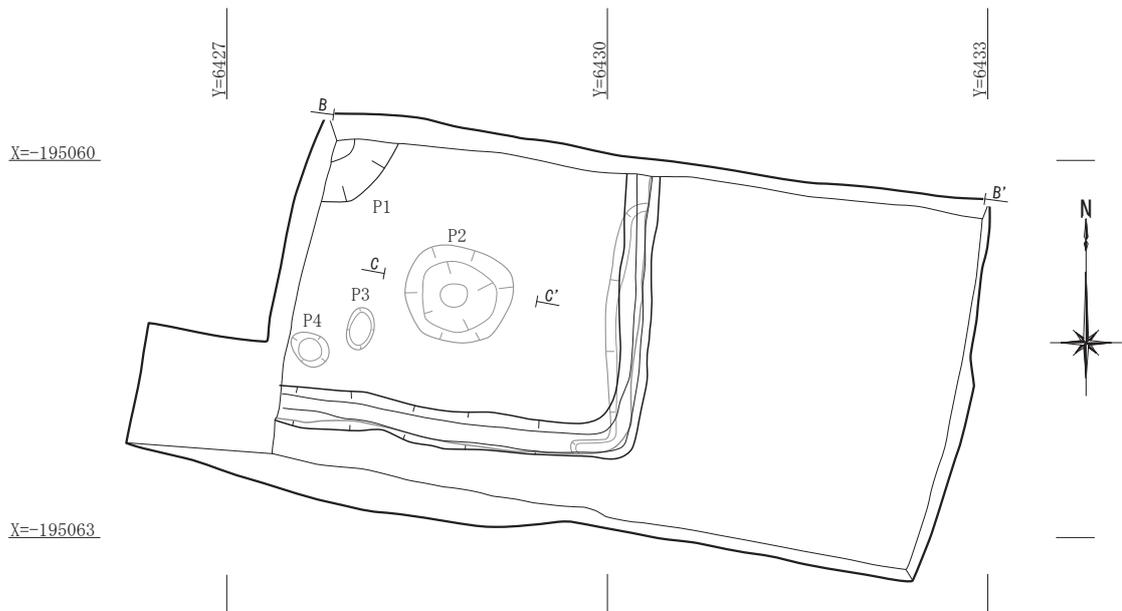
SI1 竪穴住居跡 (第7図)

調査区の中央部から西側にかけて検出された。SD1 溝跡と重複し、これよりも古い。検出された規模は南北約 2.2m、東西約 2.7m で遺構検出面から床面までの深さは約 18～34cm で、堀方底面までの深さは約 30～54cm である。平面形状は隅丸方形を呈するものと推定され、方位は東辺を基準とすると N-7° -E である。

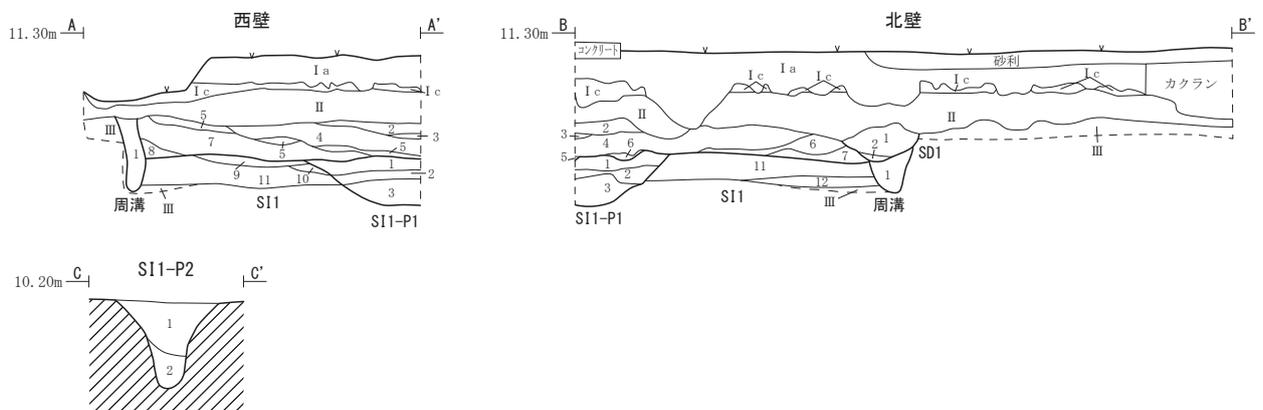
堆積土は大きく上層 (2～6 層) と下層 (7・8 層) に分けられる。下層には基本層 III 層ブロックが斑状に多量



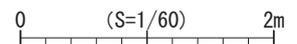
南小泉遺跡第91次平面図(1)



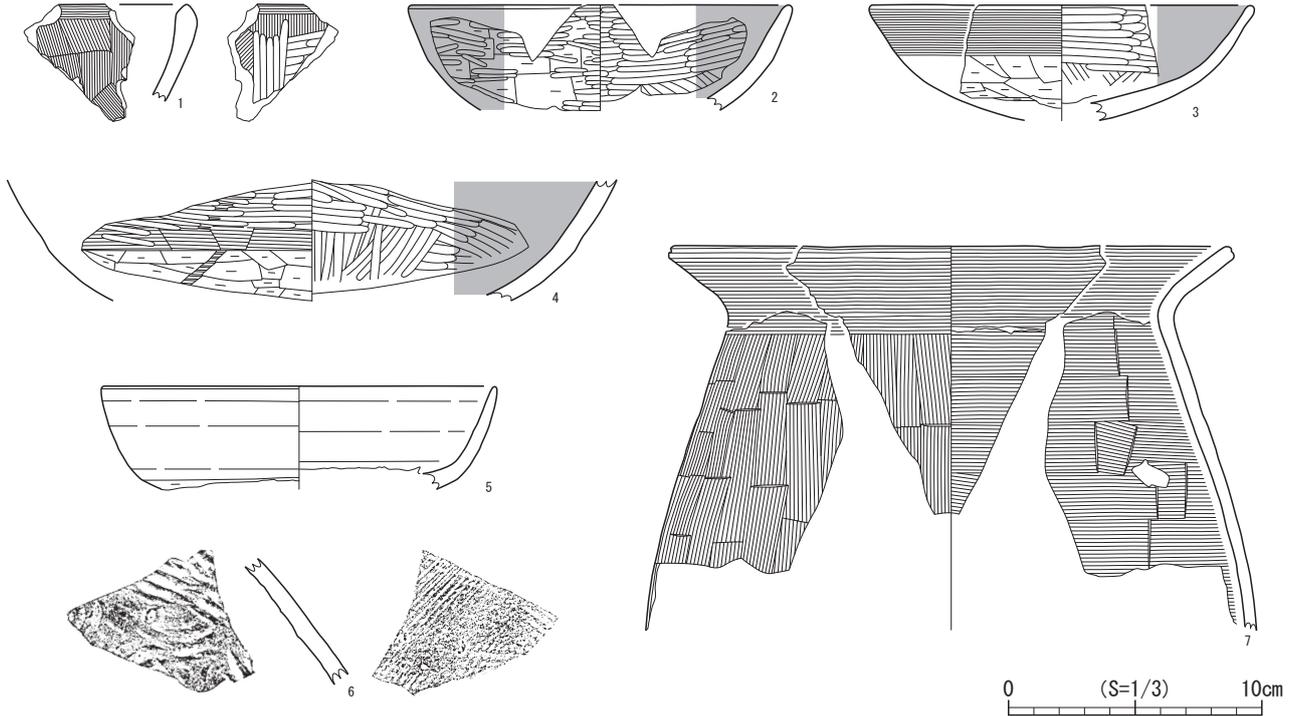
南小泉遺跡第91次平面図(2)



南小泉遺跡第91次調査区西・北壁・S11-P2 土層断面
第7図 第91次調査区平面・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物		遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物		
SI1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	周溝	Ⅲ層ブロック (φ 5 cm) を少量含む。	SI1-P1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。		
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	堆積土	白色粒 (φ 1 mm) を少量含む。		2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック (φ 2 cm) を斑状に含む。		
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		ほぼ均質。		3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック (φ 2~5 cm) を斑状に含む。		
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		白色粒 (φ 1~2 mm) を斑状、炭化物粒 (φ 5 mm) を少量含む。	SI1-P2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層ブロック (φ 2 cm) を斑状、炭化物 (φ 1 cm) を少量含む。		
	5	10YR2/2 黒褐色	粘土		炭化物主体。		2	10YR4/6 褐色	粘土	Ⅲ層ブロック主体。炭化物粒 (φ 1 mm) を少量含む。		
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		堀方埋土 1	炭化物 (φ 2 cm)・Ⅲ層ブロック (φ 1 cm) を少量含む。	SD1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック (φ 2~5 cm) を斑状に含む。	
	7	10YR4/6 褐色	粘土質シルト			Ⅲ層ブロック (φ 2 cm) を斑状に多量含む。		2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。	
	8	10YR4/6 褐色	粘土質シルト			Ⅲ層ブロック主体。	P1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	ほぼ均質。	
	9	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		堀方埋土 2	Ⅲ層ブロック (φ 1 cm) を少量含む。						
	10	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト			Ⅲ層ブロック (φ 1 cm) を少量含む。						
	11	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		Ⅲ層ブロック主体。焼土粒 (φ 5 mm) を少量、炭化物 (φ 5 mm) を含む。							
	12	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		Ⅲ層ブロックを斑状に含む。							



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-2	掘方	土師器	鉢	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ→ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	5-1
2	C-1	掘方	土師器	坏	(14.9)	-	-	手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	5-2
3	C-4	掘方	土師器	坏	(15.0)	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	5-4
4	C-3	掘方	土師器	坏	-	-	-	口：ハケメ→ヘラナデ→ヘラミガキ 体：ハケメ→ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	5-3
5	E-1	掘方	須恵器	高台付坏	(15.4)	-	-	口～体：ロクロナデ 底：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	5-5
6	E-2	掘方	須恵器	甕	-	-	-	平行タタキ目→カキメ	当て具痕 (青海波文)	胎土緻密 砂粒を含む	5-6
7	C-5	掘方?	土師器	甕	21.8	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ 口唇部は面を有して浅く細い沈線が1条一部に認められる	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒・海綿骨針を含む 口縁部に赤彩された痕跡がある	5-7

第8図 SI1 堅穴住居跡出土遺物

に含まれ、上層との境に炭化物が層状に含まれる。

床面からはピットが1基 (SI1-P1) 検出されている。ピットの規模は東西約 50 cm以上、南北 54 cm以上、床面からの深さは約 40 cmである。周溝の堆積土はにぶい黄褐色の砂質シルトで、基本層Ⅲ層ブロックが少量混じる。調査区西壁の土層断面を確認したところ周溝内の堆積土が住居堆積土の土層まで立ち上がることから、周溝に板材などを設置した壁際の土留めが、住居が廃絶した後に埋没する際にも残存していた可能性がある。

堀方埋土 (9~11層) は基本層Ⅲ層ブロックが主体で、焼土粒、炭化粒などが混じり、厚さは約 16~22 cmである。埋土内からは土師器を中心に一定量の遺物が出土し、また底面も比較的平坦で部分的に硬化していたことから、堀方底面も古い時期の床面であった可能性がある。この面からはSI1-P2~4の3基のピットが検出されている。

第3節 第91次調査

平面形状はいずれも円形もしくは楕円形を呈し、このうちP2は直径約77～85cm、深さは約70cmで、断面形状は上面に近いほど広がる漏斗型を呈している。堆積土は黄褐色と褐色の粘土で2層に細分される。検出された位置関係と規模から、竪穴住居跡の南東側の支柱穴であると推定される。

遺物は堀方埋土を中心に須恵器の坏（高台付坏？）や甕、丸底の土師器の坏、碗、甕等が出土しており、今回はその内の7点を図化した。土師器の坏、碗類はいずれも丸底と推定される。また土師器の甕は外面に縦方向のヘラナデが、内面は横方向のヘラナデが施されており、体部下半が最も膨れる形状と推定される。また堀方埋土層から出土した坏の破片が第92次調査区のSI2竪穴住居跡から出土したC-27（第12図5）と接合している。出土した遺物の様相から時期は7世紀末頃に比定され、これは隣接する第92次調査区のSI1～3竪穴住居跡とほぼ同時期と推定される。



1. 遺構検出状況（西から）



2. SI1 竪穴住居跡検出状況（西から）



3. SI1 竪穴住居跡床面検出状況（北から）



4. SI1 竪穴住居跡床面完掘状況（西から）



5. SI1 竪穴住居跡堀方完掘状況（北から）



6. SI1-P2 土層断面（南から）



1. S11 竪穴住居跡完掘状況（北から）



2. 調査区内作業状況（西から）



3. 調査区西壁土層断面（南東から）

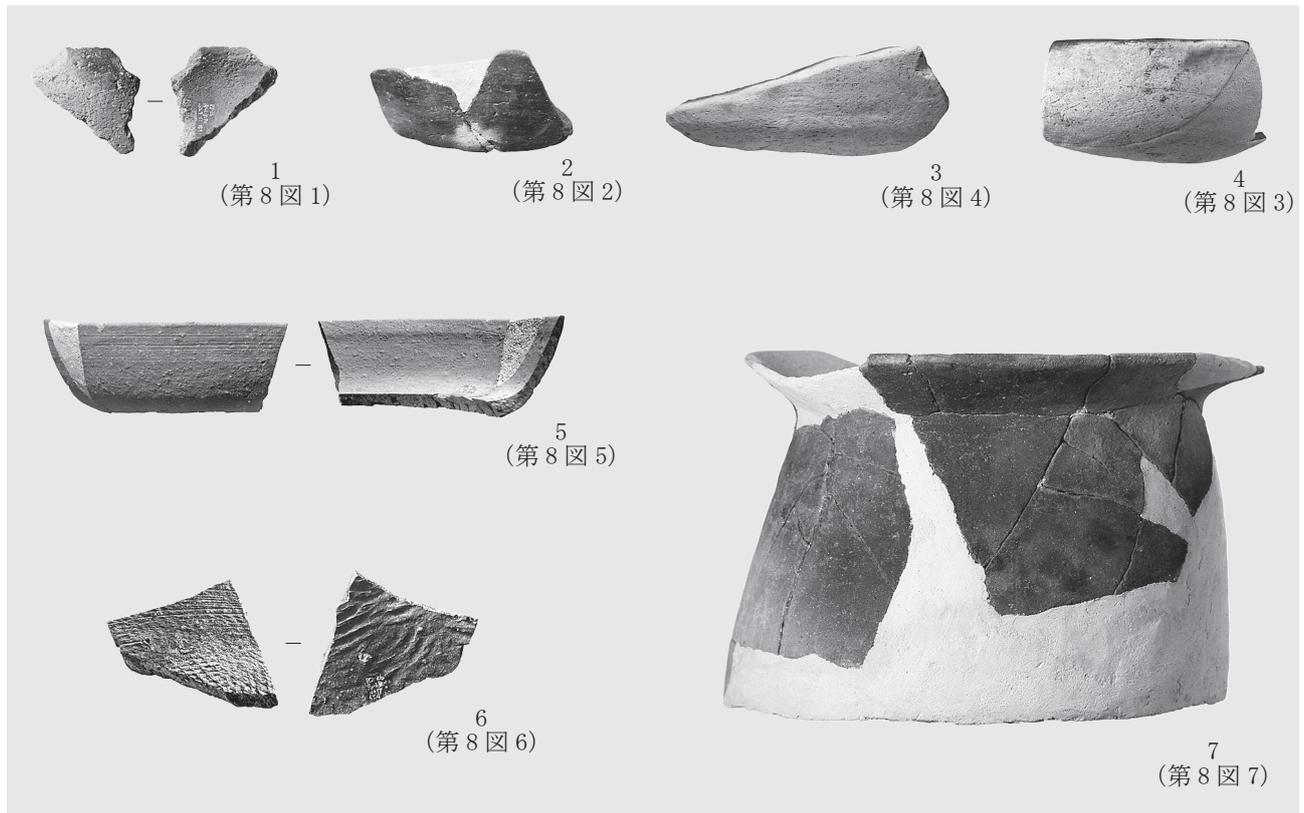


4. 調査区西壁土層断面（東から）



5. 調査区北壁土層断面（南から）

写真図版4 南小泉遺跡第91次調査（2）



写真図版5 南小泉遺跡第91次調査出土遺物

第4節 第92次調査

1. 調査要項	調査面積	20.22㎡	
遺跡名	南小泉遺跡	調査原因	個人住宅建築工事
	(宮城県遺跡登録番号 01021)	調査主体	仙台市教育委員会
調査地点	仙台市若林区一本杉町23番4の一部(A区画)	調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
調査期間	令和2年9月28日 ～10月14日	担当職員	主査 近藤勇亮 主任 及川謙作 主事 柳澤 楓
調査対象面積	59.62㎡(敷地面積 139.68㎡)		

2. 調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は令和2年8月25日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和2年8月27日付R2教生文第101-190号で通知)に基づき実施した。

調査地点は遺跡の北西側に位置する。調査では対象地内に東西3.0m×南北5.0mの調査区を設定し掘削を行ったところ、調査区の南側に遺構が広がることが確認されたことから、最終的に南北の長さを約6.7mまで拡張して掘削を行った。重機によりⅠ・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行い、竪穴住居跡3軒、土坑8基、ピット6基を検出し、遺物は基本層および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器、土製品、陶器などが出土した。

遺構の記録は、調査区平面図および調査区各壁土層断面図等(S=1/20)を作製し、デジタルカメラにより写真撮影を行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 発見遺構と出土遺物

調査では、竪穴住居跡3軒、土坑8基、ピット6基を検出した。遺物はⅠ～Ⅲ層上面、および各遺構の堆積土中から土師器や須恵器、土製品、陶器などが出土した。

(1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡 (第9図)

調査区の南側で検出された。SI2 竪穴住居跡とSK7 土坑と重複しこれらよりも新しい。検出規模は東西約2.8m、南北は約2.8mで、さらに調査区の外に広がる。北辺を基準とした方向はE-9°-Nである。検出面から約16～22cmの深さで床面が検出された。床面はほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる箇所と、緩やかに立ち上がる箇所がある。床面からはピットが5基検出された。その内P1は62～82cmの規模で、平面形状はやや歪な円形を呈する。床面からの深さは約24cmで、断面形状は浅い皿型を呈する。柱痕跡は検出されていない。また住居の壁に沿う形で周溝が検出された。周溝の幅は約26～35cmで、床面からの深さは約10cmである。断面形状は浅いU字型を呈する。床面はSI2 竪穴住居跡の床面とレベルがほぼ同一であり、出土遺物もほぼ同時期と判断されることから、SI2 竪穴住居跡の床面を再利用していたものと推測される。

堆積土は3層確認され、いずれも暗褐色の粘土質シルトであるが、層によって炭化粒の混入具合が異なる。堀方埋土は住居の西側、SI2 竪穴住居跡と重複しない範囲で2層確認された。

堆積土中および周溝、堀方埋土、付随するピットなどから土師器の坏を主体として、土師器の甕、須恵器の坏、蓋、土製品の支脚などの遺物が出土し、今回はその内の25点を図化した(第10・11図)。土師器の坏は丸底のものが主体で、平底で器高の低いものが少量混じる。

遺物の年代は7世紀後半から7世紀末頃と推定されるが、遺構の時期は重複関係などから、7世紀末頃と考えられる。

SI2 竪穴住居跡 (第9図)

調査区の南東側で検出された。SI1、3 竪穴住居跡とSK6 土坑と重複し、SI3 竪穴住居跡よりも新しく、SI1 竪穴住居跡とSK6 土坑より古い。検出規模は東西約2.8m、南北約4.6mで、さらに調査区の東側と南側に広がる。西辺を基準とした方向はN-5°-Wである。検出面から約18～24cmの深さで床面が検出された。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面からは住居の壁に沿う形で周溝が検出された。周溝の幅は約24～37cmで、床面からの深さは約10cmである。断面形状は浅いU字型を呈する。

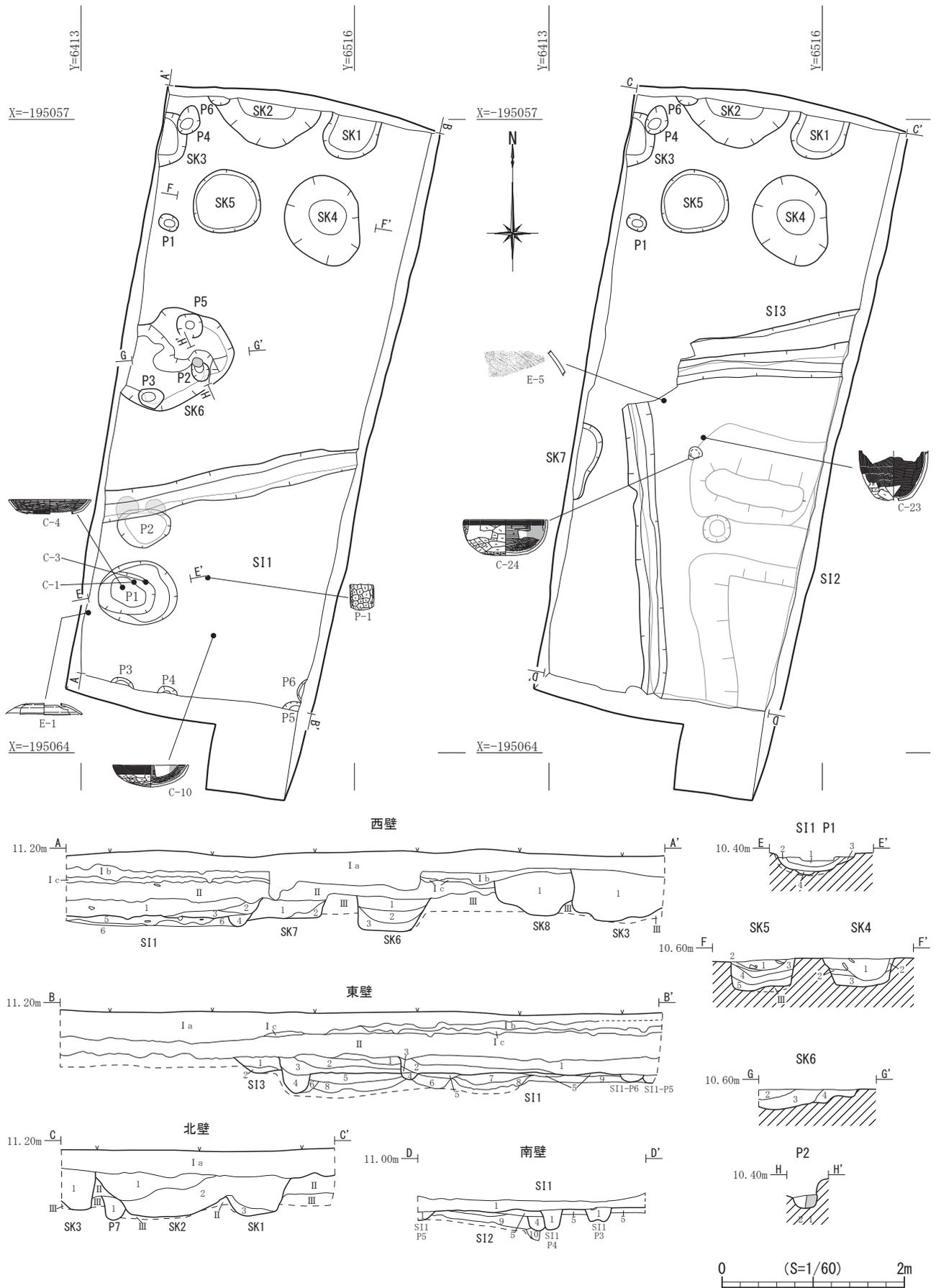
堆積土は3層確認された。いずれも暗褐色もしくはにぶい黄褐色の粘土質シルトである。基本層Ⅲ層ブロックが比較的少量に含まれている層が存在することから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。床面は約10cmの厚さの堀方埋土を踏み固めるような形で、ほぼ平坦に構築されている。床面の下層からは堀方埋土が6層確認された。堀方埋土は住居の際部分を中心に溝状に、また部分的にピット状に掘り込まれているのが確認された。

堆積土中および周溝、堀方埋土から土師器の坏と埴、鉢、甕、須恵器の甕などの遺物が出土した。坏は丸底のものに加え、平底で内面黒色処理が施されたC-27(第12図5)が出土している。C-27は口径約16.4cm、底径約13.0cmで、器高は約2.5cmで外形が大きく器高が低い。またそれ以外には内外面黒色処理が施された土師器の蓋(C-31、第12図6)や、外面に矢羽根状の叩きが施された須恵器の甕(E-5、第12図11)などが出土している。

出土遺物の様相から遺構の時期は7世紀末頃と考えられる。

SI3 竪穴住居跡 (第9図)

調査区の中央部で検出された。SI2 竪穴住居跡とSK6 土坑と重複し、これらよりも古い。検出規模は東西約1.8m、



第9図 第92次調査区平面・断面図

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SI1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ1cm)を下層との境を中心に斑状に、Ⅲ層ブロック(φ1cm)を少量、遺物を含む。	SI2	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)・Ⅲ層ブロック(φ2cm)を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	Ⅲ層ブロック(φ2cm)・炭化粒(φ2mm)を少量含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ5cm)を斑状に、炭化粒(φ2mm)・焼土粒(φ2mm)を少量含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ5mm)を斑状に、焼土粒(φ2mm)を少量含む。		3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ2cm)を少量、焼土粒(φ5mm)をやや多量に含む。
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ1cm)を少量含む。周溝。		4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)を少量含む。下層との境にⅢ層ブロック(φ1cm)斑状に堆積。周溝。
	5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ2cm)・炭化粒(φ5mm)・焼土ブロック(φ1cm)を少量、遺物を含む。		5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ2cm)を斑状に、炭化粒(φ5mm)を少量含む。掘方。
	6	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	炭化物が下層との境に層状に堆積している箇所あり。Ⅲ層ブロック主体		6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1~5cm)を斑状に、焼土粒(φ5mm)を少量含む。掘方。
SI1-P1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ1cm)・焼土粒(φ5mm)を斑状に含む。下層との境に炭化物が堆積。	7	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物層状に、焼土粒(5mm)斑状に堆積。掘方。	
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に、炭化物(φ1cm)・焼土粒(φ5mm)を少量含む。	8	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体、炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)を少量含む。掘方。	
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に多量に、焼土粒(φ5mm)を少量含む。	9	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。掘方。	
	4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。炭化物(φ5mm)を少量含む。	10	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒(φ5mm)・炭化粒(φ2mm)を少量含む。掘方。	
SI1-P3	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に、炭化物(φ5mm)を少量含む。	SI3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)を少量含む。
SI1-P4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に、炭化物(φ5mm)を少量含む。		2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。
SI1-P5	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に、炭化物(φ5mm)を少量含む。	SK6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)を少量含む。
SI1-P6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に、炭化物(φ5mm)を少量含む。		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)・焼土粒(φ5mm)を部分的に斑状に、Ⅲ層ブロックを少量含む。
SK1・SK2	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ5cm)・炭化物(φ1cm)を少量含む。		3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ3cm)を斑状に、炭化粒(φ5mm)を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物(φ1~2cm)を斑状に、鉄(?)、Ⅲ層ブロック(φ2cm)を少量含む。		4	10YR3/4 暗褐色	シルト	Ⅲ層ブロック多く含む。
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体。炭化物(φ5mm)を少量含む。	SK7	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ2~5cm)を斑状に、炭化粒(φ5mm)を少量含む。
SK3	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ1cm)を斑状に多量、炭化物(φ1cm)を少量含む。		2	10YR4/6 褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック主体。暗褐色粘土質シルトブロック(φ1cm)を少量含む。
SK4	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物(φ1~5cm)を多量に、Ⅲ層ブロック(φ1cm)を多く、荒砂ブロック(φ5~10cm)を少量含む。	SK8	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ5cm)を斑状に、焼土粒(φ5mm)を少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土ブロック(φ1cm)、Ⅲ層ブロック(φ1cm)を少量含む。		P2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック(φ1cm)・Ⅲ層ブロック(φ1cm)・荒砂ブロック(φ10cm)を少量含む。	2		10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック(φ2cm)を斑状に含む。
SK5	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物(φ1cm)、酸化鉄を少量含む。					
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	Ⅲ層ブロックを多く含む。Ⅲ層主体。					
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒(φ5mm)を少量含む。					
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック少量、炭化粒(φ5mm~1cm)を含む。					
	5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロックを多く、炭化粒(φ5mm)を少量含む。					

南北約 35 cmで、さらに調査区の東側に広がる。北辺を基準とした方向はE-10°-Nである。検出面から約 18 ~ 24 cmの深さで床面が検出された。壁面はやや傾斜して立ち上がる。

堆積土は2層確認された。褐色もしくはにぶい黄褐色の粘土質シルトで、基本層Ⅲ層ブロックが斑状に比較的多量に含まれていることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。床面は基本層との境界部分を踏み固めるような形で構築されていた。周溝や堀方埋土は確認されなかった。

堆積土中から土師器と須恵器などの遺物が出土し、その内1点を図化した。図化したC-5(第13図1)はSI1・2 堅穴住居跡から出土した土師器坏に比べると小型でやや古手であると推定される。

遺構の時期は出土遺物と重複関係から7世紀末以前と考えられる。

(2) 土坑

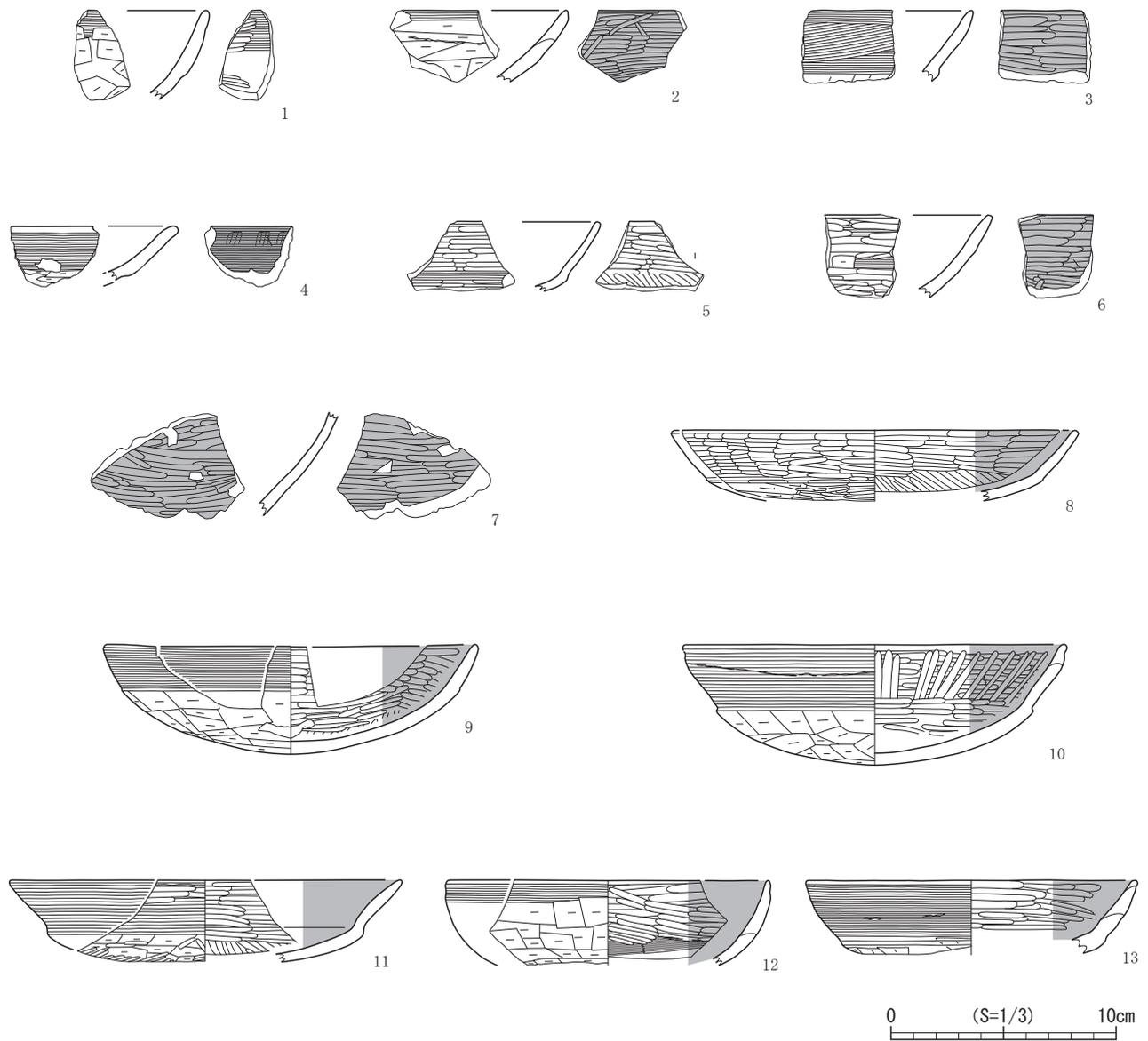
SK1 土坑 (第9図)

調査区の北側で検出された。基本層 I b 層上面から掘り込まれている。土層断面を観察したところ西側に隣接する SK2 土坑とは同時に埋め戻されていることが確認された。検出された規模は南北約 0.5m、東西約 0.65mで、調査区の北側にさらに広がる。平面形状はやや歪んだ円形を呈すると推定される。

堆積土は3層確認され、いずれも炭化物が混入する。その中で2層からは炭化物と酸化鉄粒が比較的多量に混入する。断面形状はやや開いたU字型を呈する。検出面からの深さは約 50 cmである。

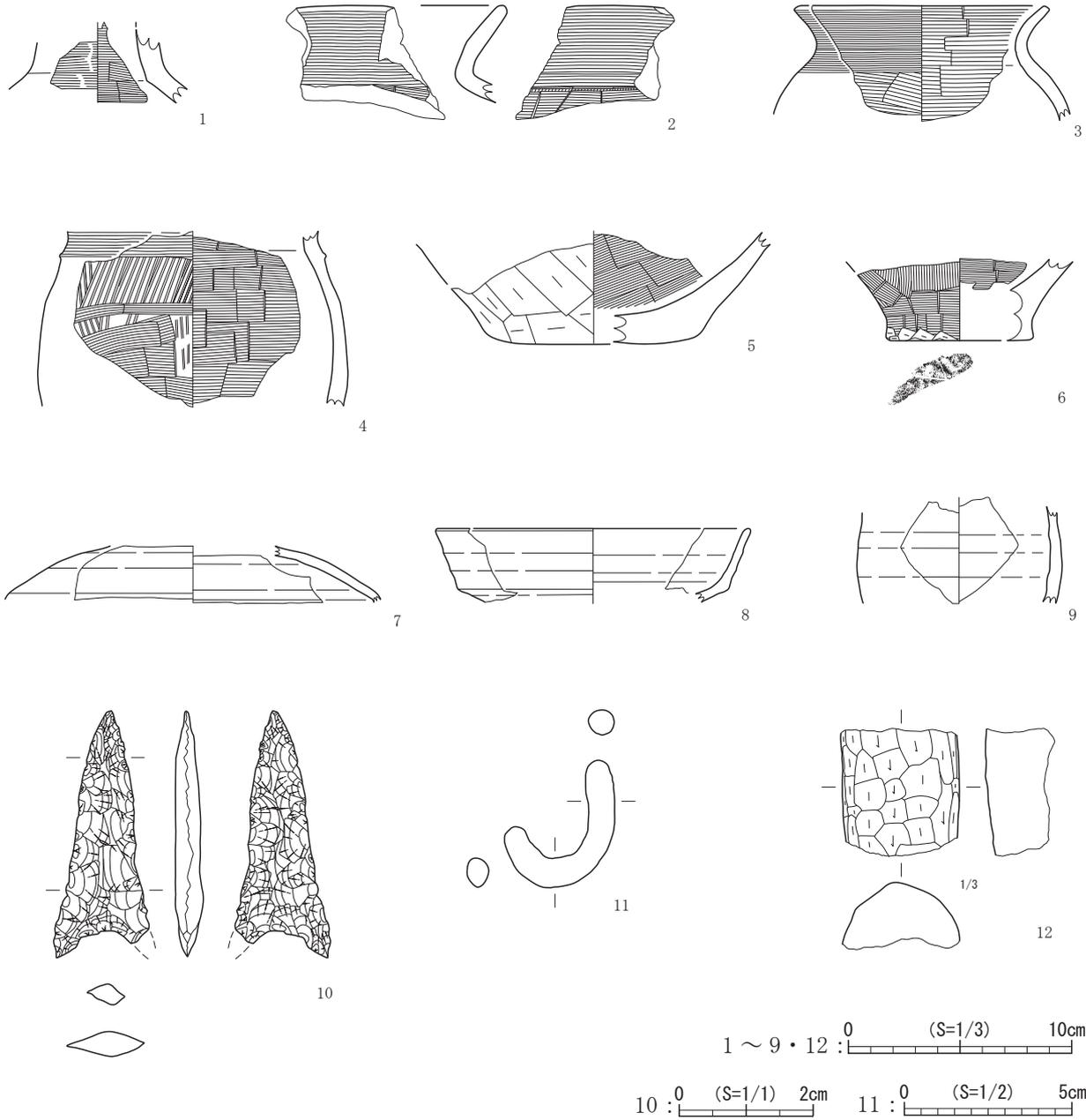
遺物は陶器片などが出土している。基本層 I b 層から掘り込まれていることから、時期は近世以降と推定される。

第4節 第92次調査



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-3	床面	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 赤褐色を呈する	10-1
2	C-6	床面	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ 積上痕有り	ヘラミガキ・黒色処理	-	10-2
3	C-8	床面	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 下半の強いヨコナデで段を形成 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密	10-3
4	C-11	-	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ナデ→ヨコナデ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	10-4
5	C-12	-	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ→ヘラミガキ 体：ヘラミガキ	ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 橙色を呈する	10-5
6	C-14	遺構西側床面	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ→ヘラミガキ 体：ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	10-6
7	C-1	-	土師器	坏	-	-	-	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	-	10-7
8	C-4	床面	土師器	坏	(17.8)	-	-	口：ヘラミガキ 体：ヨコナデ→ヘラミガキ 底：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	-	10-8
9	C-10	床面	土師器	坏	(16.4)	-	(4.9)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ 口縁部と体部の境界に段を形成	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	10-9
10	C-15	掘方埋土	土師器	坏	(17.0)	-	5.4	口：ヨコナデ (粘土紐の積上痕あり) 体：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	10-10
11	C-9	堆積土～床面	土師器	坏	(17.4)	-	(3.6)	口：ヨコナデ→上端部ヘラミガキ 体：手持ちヘラケズリ→一部ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海綿骨針を含む 口縁部上端部に粘土紐の積上痕を残している	10-11
12	C-13	堆積土～床面	土師器	坏	(14.2)	-	-	口：ヨコナデ 体：手持ちヘラケズリ	口～体上半：ヘラミガキ・黒色処理 体下半：ナデ・黒色処理	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない 内面に粘土紐の積上痕が残る	10-12
13	C-16	掘方埋土	土師器	坏	(4.8)	-	-	口：ヨコナデ 体：手持ちヘラケズリ 口縁部に粘土紐の積上痕が残る	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	10-13

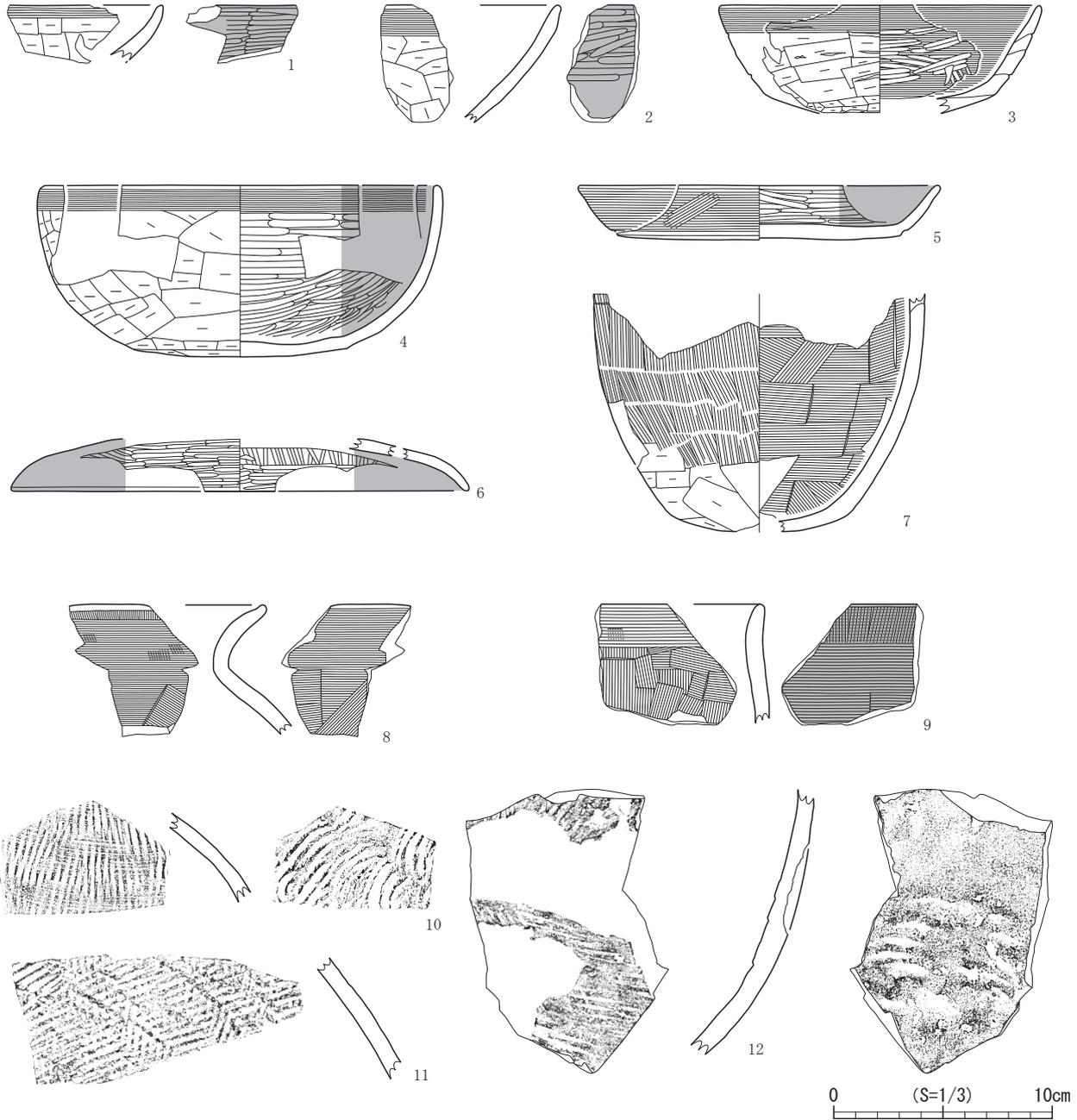
第10図 S11 竪穴住居跡出土遺物 (1)



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-19	床面	土師器	高坏	-	-	-	ナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む 脚部中位に窓あり	10-14
2	C-20	-	土師器	甕	-	-	-	口へ体:ヨコナデ 体:ヘラナデ	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-15
3	C-22	堆積土~床面	土師器	甕	(11.4)	-	-	口:ヨコナデ 上:ヨコナデ 体:ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-16
4	C-17	掘方埋土	土師器	甕	-	-	-	口:ヨコナデ 体:ハケメヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-17
5	C-18	床面	土師器	甕	-	(9.0)	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を多く含む	10-18
6	C-21	堆積土~床面	土師器	甕	-	(6.6)	-	体:ヘラナデ 体下半:ヘラケズリ 底:木葉痕	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む No.12と接合	10-19
-	C-26	床面	土師器	鉢	-	-	-	口:ヨコナデ	ヨコナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-20
7	E-1	床面	須恵器	蓋	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-21
8	E-2	-	須恵器	高台付坏?	(14.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒をほとんど含まない	10-22
9	E-3	-	須恵器	壺	-	-	-	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	10-23

図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ		
10	K-1	遺構西側床面	打製石器	石鏃	3.7	2.4	0.4	凹基式の打製石鏃 再加工している 石材:珪質頁岩 重さ1.6g	10-24
11	N-1	-	金属製品	不明	3.9	3.3	0.6	鉄製の金属製品 重さ7.1g	10-25
12	P-1	床面	土製品	支脚	-	5.2	-	外面ケズリ	10-26

第11図 S11 竪穴住居跡出土遺物(2)



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-30	掘方	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-1
2	C-29	掘方	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-2
3	C-25	周溝	土師器	坏	(14.6)	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ 粘土紐積上痕が明瞭に残る	口：ヨコナデ 体：ヨコナデ→ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	11-3
4	C-24	床面	土師器	坏	(18.0)	9.8	7.9	口：ヨコナデ 体～底：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体～底：ヘラミガキ	胎土緻密 砂粒・海綿骨針を含む	11-4
5	C-27	堆積層～床面	土師器	坏	(16.4)	(13.0)	2.5	口：ヨコナデ ナデ 底：ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-5
6	C-31	堆積層～床面	土師器	蓋	(21.0)	-	-	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を少量含む	11-6
7	C-23	床面	土師器	甕	-	(7.8)	-	ハケメ 底部付近はヘラケズリ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を多く含む	11-7
8	C-28	掘方	土師器	甕	-	-	-	口上端：ナデ 口・体上端：ナデ→ヨコナデ 体：ヘラナデ	口・体上端：ヨコナデ 体：ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	11-8
9	C-32	掘方	土師器	甕	-	-	-	口：ヘラナデ→ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ→タテナデ 体上端：ヨコナデ 体下半：ヘラナデ これらの調整ののちに黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-9
10	E-4	掘方	須恵器	甕	-	-	-	平行タキ目→カキメ	当て具痕(青海波文)	胎土緻密 砂粒を含む	11-10
11	E-5	床面	須恵器	甕	-	-	-	矢羽状タキ目	ナデ	胎土緻密 白色砂(凝灰岩由来?)粒を含む	11-11
12	E-6	堆積層～床面	須恵器	甕	-	-	-	平行タキ目→ナデ	当て具痕→ナデ	胎土緻密 砂粒を含む 外面の一部剥落	11-12

第12図 S12 竪穴住居跡出土遺物

SK2 土坑（第9図）

調査区の北側で検出された。SK3 土坑と P6 と重複し、これらよりも新しい。基本層 I b 層上面から掘り込まれている。土層断面を観察したところ東側に隣接する SK1 土坑とは同時に埋め戻されていることが確認された。南北約 0.5m、東西約 1.26m で、調査区の北側にさらに広がる。平面形状は円形を呈すると推定される。

堆積土は SK1 土坑と一連のものである。断面形状は開いた逆台形を呈する。検出面からの深さは約 50 cm である。遺物は陶器片などが出土している。基本層 I b 層から掘り込まれていることから、時期は近世以降と推定される。

SK3 土坑（第9図）

調査区の北西側で検出された。SK2 土坑と P4 と重複し、SK2 土坑より古く、P4 よりも新しい。基本層 I b 層上面から掘り込まれている。検出された規模は東西約 0.3m、南北約 0.7m で、調査区の西側にさらに広がる。平面形状は隅丸方形に近い円形を呈すると推定される。

堆積土は暗褐色の粘土質シルトの単層で炭化物と基本層 III 層ブロックが少量混入する。断面形状はやや開いた U 字型を呈する。検出面からの深さは約 46 cm で、堆積土中には埴焼の大甕（Ic-1、第 13 図 4）が埋め込まれていた。

大甕は素地が軟質で浅黄橙色を呈している。体部の内外面に 3ヶ所の繋ぎ目とロクロ調整の痕跡が残る。底部の一部を除き内外面全面に黒褐色釉が施され、口縁部から体部にかけては白色釉が流し掛けされている。器形は口縁部が最も径が大きく、頸部は「く」字型に屈曲し受け口状になっている。

類似した器形のは新妻家墓所第 6 号墓から出土している。第 6 号墓から出土したものは素焼きで、Ic-1 と比べるとおおそ 2/3 ~ 3/5 の大きさではあるものの、頸部から口縁部の形状が特に類似する。墓石の銘から幕末頃の慶応 2 年に使用されていたことが判明しており、Ic-1 もそれに近い時期のものとして推定される。

SK4 土坑（第9図）

調査区の北側で SK5 土坑と隣接する形で検出された。検出された規模は東西約 0.83m、南北約 1.0m である。平面形状はやや歪な円形を呈する。

堆積土は暗褐色のシルト、もしくは粘土質シルトで 3層確認された。最上層に炭化物が多量に混入する。その他の層にも基本層 III 層ブロックが混入する。断面形状はやや開いた U 字型を呈する。検出面からの深さは約 30 cm である。1層に陶器の大甕が埋め込まれていた。

出土遺物から、時期は近世以降と推定される。

SK5 土坑（第9図）

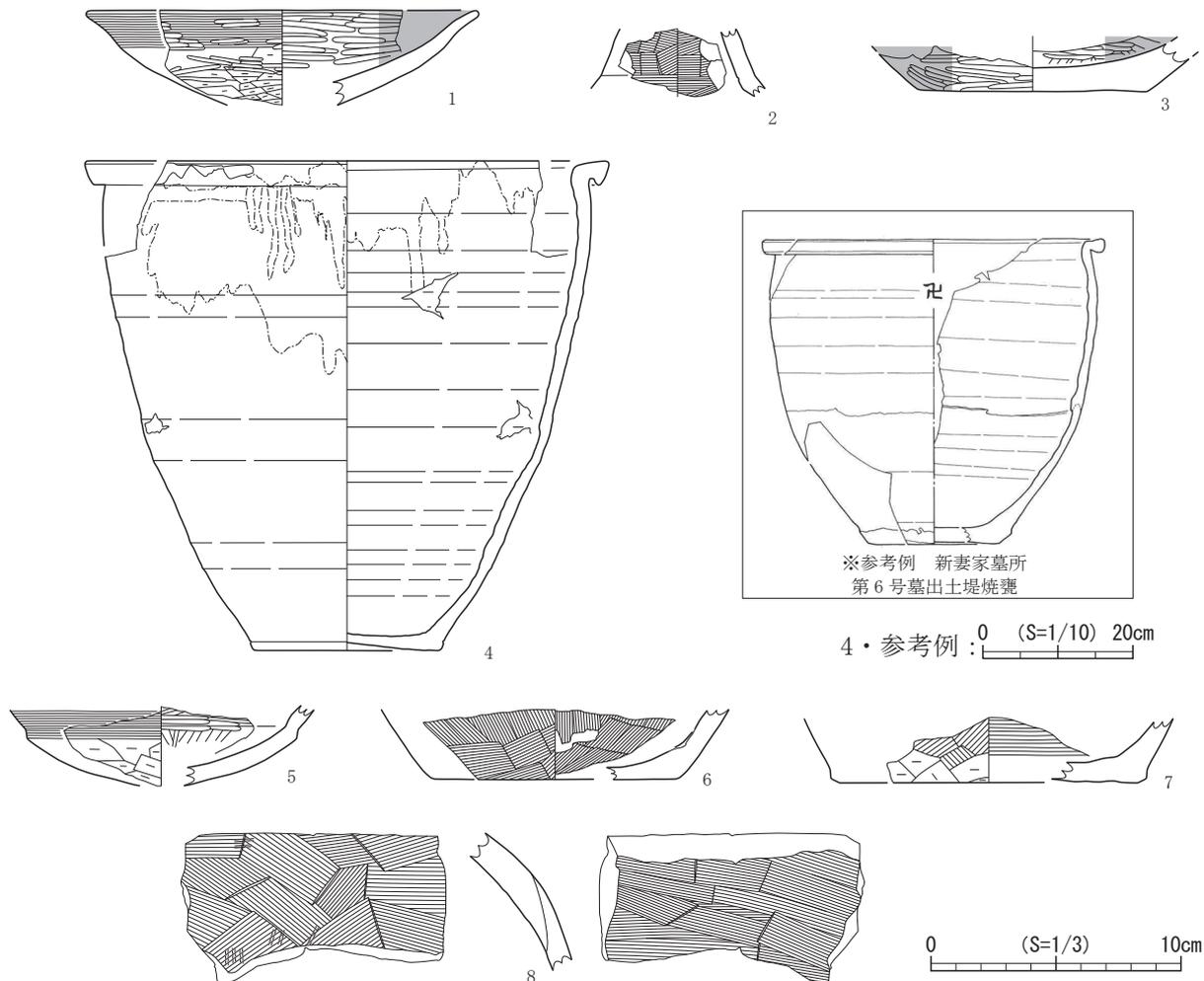
調査区の北側で SK4 土坑と隣接する形で検出された。検出された規模は東西約 0.7m、南北約 1.0m である。平面形状は隅丸方形に近い円形を呈する。

堆積土は暗褐色のシルト、もしくは粘土質シルトで 5層確認された。炭化物が混入する層と、基本層 III 層ブロックが主体となる層がある。断面形状はやや浅い U 字型を呈する。検出面からの深さは約 35 cm である。1層に陶器の大甕が埋め込まれていた。

出土遺物から、時期は近世以降と推定される。

SK6 土坑（第9図）

調査区の中央部西側で検出された。基本層 III 層上面から掘り込まれている。SI2、3 竪穴住居跡と P2、3、5 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。検出された規模は東西約 1.2m、南北約 1.1m で、調査区の西側にさらに広がる。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-5	SI3	床面	土師器	坏	(15.4)	-	-	口：ヨコナデ→一部ヘラミガキ 体：手持ちヘラケズリ→一部ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒・海綿骨針を含む	11-13
2	C-33	SK6	-	土師器	高坏	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む 脚部破片 窓がある可能性	11-14
3	C-34	SK6	-	土師器	甕	-	9.1	-	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-15
4	Ic-1	SK3	1	陶器	甕	(69.0)	24.4	65.8	積み上げ継ぎ目3ヶ所、黒褐色施釉→口縁部から体部中央にかけて白軸流し掛け	積み上げ継ぎ目3ヶ所、黒褐色施釉→口縁部を中心に白軸流し掛け、底面トチン?痕	白色砂粒(凝灰岩由来?)多量、透明粒、赤色粒、黒色粒、素地浅黄橙色	11-16
5	C-38	-	Ⅲ層上面	土師器	坏	-	-	-	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ 口縁部と体部の境界に段あり	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 砂粒を含む	11-17
6	C-37	-	I～Ⅲ層上面	土師器	甕	-	(10.0)	-	ヘラナデ 底部木葉痕	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	11-18
7	C-35	-	Ⅲ層上面	土師器	甕	-	(12.4)	-	ヘラケズリ・ヘラナデ 底：木葉痕	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	11-19
8	C-36	-	Ⅲ層上面	土師器	甕	-	-	-	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を多く含む	11-20

第13図 SI3 竪穴住居跡、SK3・6 土坑、基本層出土遺物

平面形状はやや歪な円形を呈する。

堆積土は暗褐色のシルト、もしくは粘土質シルトで4層確認された。炭化物が混入する層と、基本層Ⅲ層ブロックが主体となる層がある。壁面は垂直に掘り込まれた箇所と緩やかに掘り込まれた箇所があり一定ではない。検出面からの深さは約38cmである。

遺物は土師器片が少量出土した。他の遺構との重複関係から時期は古代以降と考えられる。

SK7 土坑 (第9図)

調査区の中央部西側で検出された。基本層Ⅲ層上面から掘り込まれている。SI1 竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。検出された規模は東西約0.4m、南北約0.8mで、調査区の西側にさらに広がる。平面形状は不明である。検出面からの深さは約24cmである。

堆積土は暗褐色のシルト、もしくは粘土質シルトで2層確認された。下層は基本層Ⅲ層ブロックが主体となる。壁は比較的急角度で立ち上がる。断面形状から竪穴住居跡の一部の可能性はある。

遺物は土師器片が少量出土した。他の遺構との重複関係から時期は7世紀末以前と考えられる。

SK8 土坑（第9図）

調査区の北西側、調査区西壁の土層断面でのみ検出された。SK3 土坑と重複し、これよりも古い。基本層 I b 層の下、I c 層上面から掘り込まれている。規模は不明だが調査区の西側にさらに広がる。

堆積土は暗褐色の粘土質シルトの単層で基本層Ⅲ層ブロックと焼土ブロックが少量混入する。断面形状はU字型を呈する。検出面からの深さは約 50 cm である。

基本層 I c 層から掘り込まれていることから、時期は近世以降と推定される。

(3) ピット（第9図）

ピットは調査区内から6基検出された。いずれも平面形状は円形を呈し、規模は直径約 18～31 cm、深さは約 12～20 cm である。堆積土は 10YR3/4 暗褐色の粘土質シルトで、基本層Ⅲ層ブロックを斑状に含む。P2 には直径約 12 cm の柱痕跡が伴う。遺物は土師器片などが出土している。

4. まとめ

今回の調査地点は南小泉遺跡の北部に位置する。今回の第 90～92 次調査では竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 1 条などが検出された。竪穴住居跡からは比較的豊富な遺物が出土したが、おおよその年代は7世紀末頃に比定される。第 90・91 次調査区で検出され、竪穴住居よりも新しい SD1 溝跡と、さらにそれよりも新しい SB1 掘立柱建物跡も時期は古代と推測されるが、出土遺物に乏しいため詳細な時期は不明である。南側に隣接する第 28 次調査区や西側の第 51 次調査区からは類似した規模の柱穴で構成された掘立柱建物跡が検出されている。その他の周囲の調査区からは第 28 次と第 33 次、第 37 次、第 66 次調査区からも7世紀後葉から9世紀の時期の竪穴住居跡が検出されているが、主体となるのは7世紀後葉から8世紀前半頃のもので、今回検出された竪穴住居跡は、これら周辺の調査区で検出されている竪穴住居跡等で構成された集落の一部と考えられる。その中でも第 91 次調査区で検出された SI1 竪穴住居跡は、検出されたのが南東部分だけで全体像は不明ではあるものの遺構検出面から掘方底面までの深さが 55 cm、主柱穴も直径約 85 cm、深さも 70 cm と非常に規模が大きいことから、大型の住居跡であった可能性がある。

また近世以降の時期の遺構としては、第 92 次調査区で検出された SK1～5・8 土坑を挙げることができる。このうち SK3 土坑からは埴焼の大甕が出土しており、これは器形の類似例から幕末頃と推測される。図化はしなかったものの SK2・4・5 土坑からも類似した大甕の破片が出土しており、これらの土坑はいずれも甕を埋めて利用していた遺構群であったと推測される。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1986 『年報 7』仙台市文化財調査報告書第 94 集（新妻家墓所）
- 仙台市教育委員会 2001 『八木山緑町遺跡ほか 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 253 集（南小泉遺跡第 33 次）
- 仙台市教育委員会 2003 『国分寺東遺跡ほか 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 266 集（南小泉遺跡第 37 次）

第4節 第92次調査

仙台市教育委員会 2007 『松森城他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第310集 (南小泉遺跡第51次)

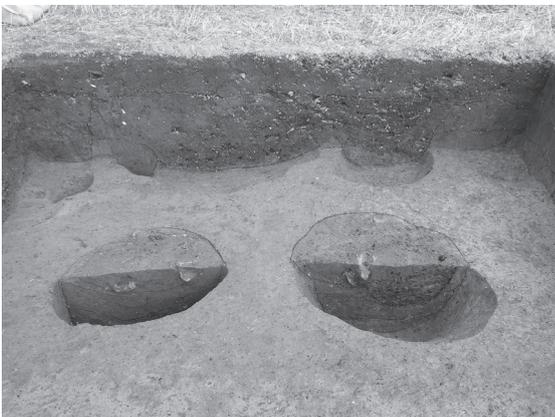
仙台市教育委員会 2008 『南小泉遺跡 第28次調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第325集

仙台市教育委員会 2012 『仙台平野の遺跡群22 ー平成23年度発掘調査報告書ー』 仙台市文化財調査報告書第404集 (南小泉遺跡第66次)

東北陶磁文化館 1987 『東北の近世陶磁』



1. 調査区全景遺構検出状況 (北から)



2. 調査区北壁、SK4・5土層断面 (南から)



3. SK6土層断面 (南から)

写真図版6 南小泉遺跡第92次調査(1)



1. S11 竪穴住居跡床面検出状況（西から）



2. S11-P1・2 検出状況（西から）



3. S11-P1 土層断面（南から）



4. S11-P1 遺物出土状況（東から）



5. S12 竪穴住居跡床面検出・遺物出土状況（北西から）

写真図版7 南小泉遺跡第92次調査(2)



1. S12 竪穴住居跡床面遺物出土状況（東から）



2. S12 竪穴住居跡床面完掘状況（南から）



3. S12 竪穴住居跡床面完掘状況（北西から）



4. S12 竪穴住居跡床面完掘状況（南から）



5. 調査区全景遺構完掘状況（南から）

写真図版 8 南小泉遺跡第92次調査（3）



1. 調査区全景遺構完掘状況（北から）



2. 調査区西壁土層断面（東から）



3. 調査区南壁土層断面（北から）

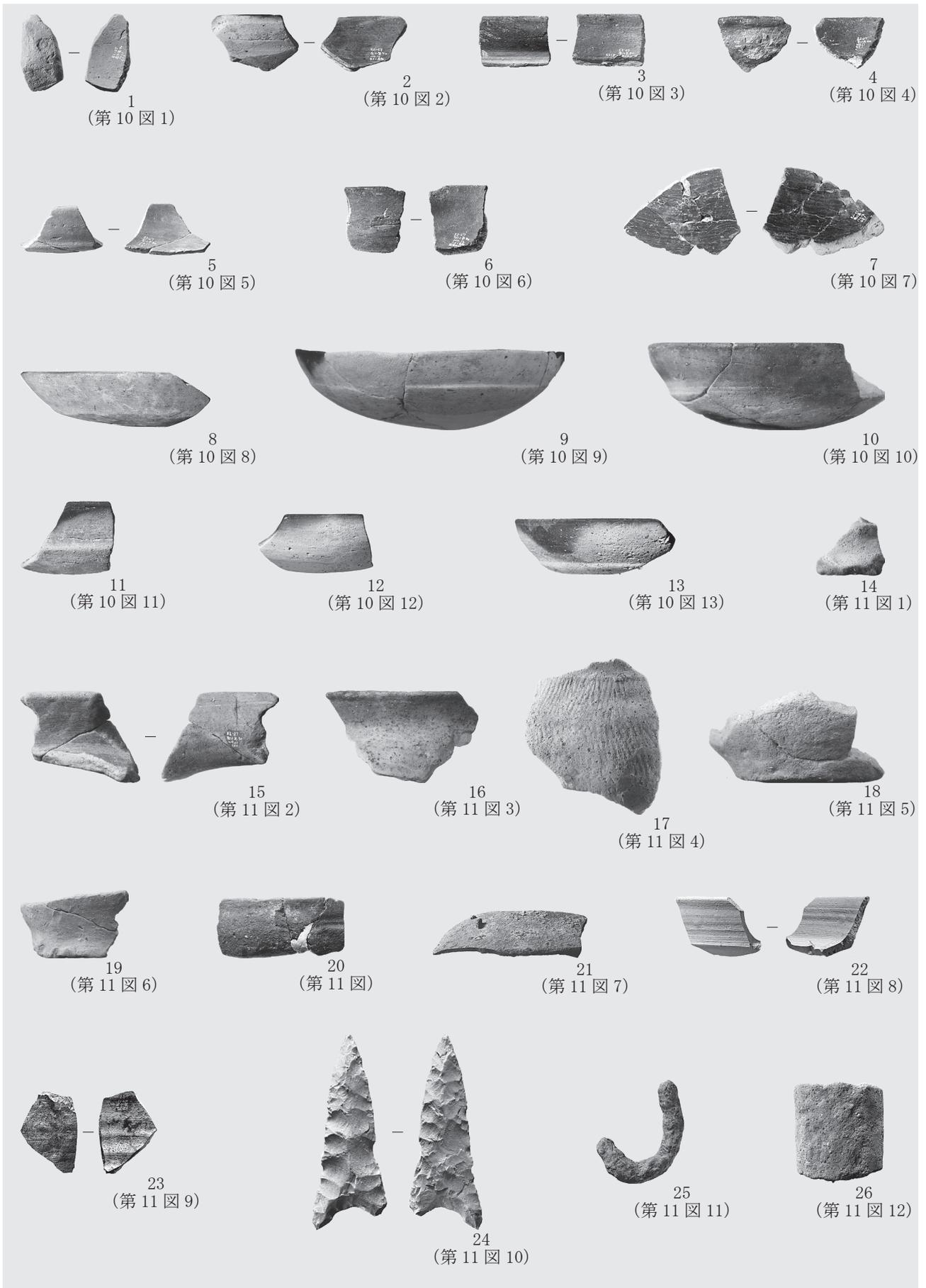


4. 調査区東壁土層断面（北から）

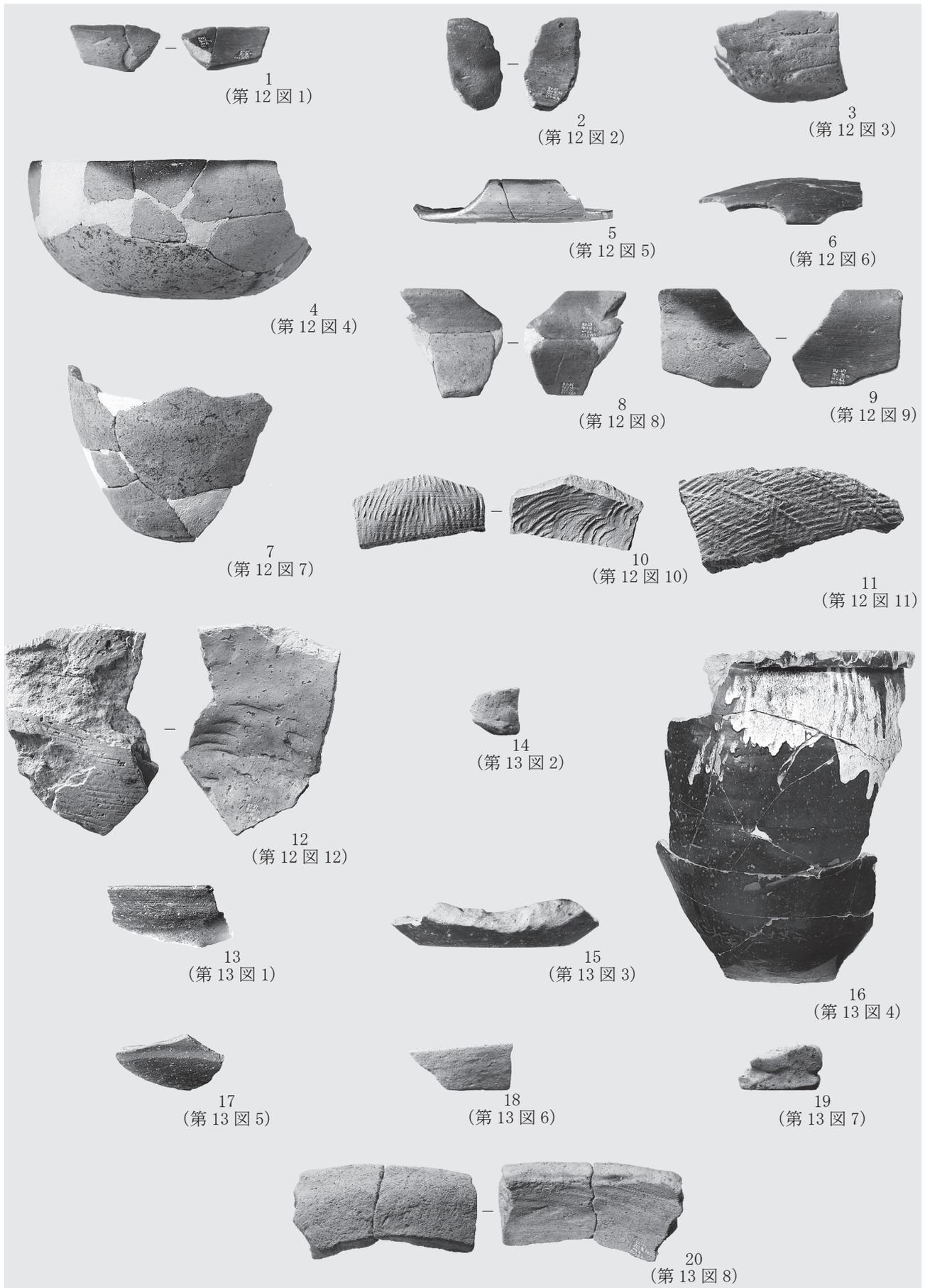


5. P11 土層断面（西から）

写真図版9 南小泉遺跡第92次調査(4)



写真図版10 南小泉遺跡第92次調査出土遺物(1)



写真図版11 南小泉遺跡第92次調査出土遺物(2)

第3章 今泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

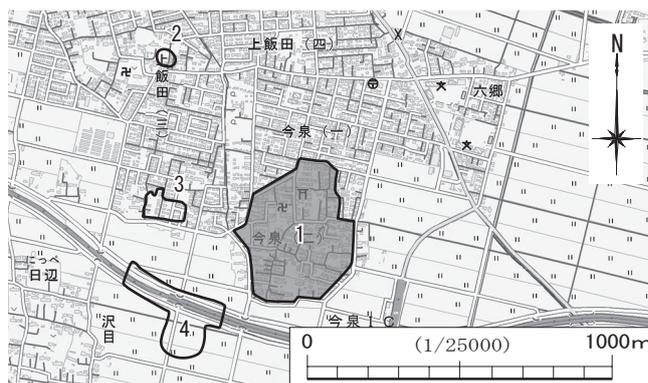
今泉遺跡はJR仙台駅の南東約6.5km、仙台南部道路今泉インターの北西約500mに位置し、標高約2～3mの自然堤防上に立地している。本遺跡は、文献などにより須田玄播（すだげんぱ）が居住した中世の城館「今泉城」として古くから知られていた（『仙台領古城書立之覚書』）が、これまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。

遺跡の主体は、中世の城館である今泉城に関わる遺構群である。城館の構造は不明確であるが、外堀の範囲が想定されており、想定範囲付近から複数の溝跡が発見されている。その内側には、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などの遺構が数多く発見されており、12世紀代に屋敷が造られ、その後、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半頃まで使われていた変遷が推定されている。

第2節 第16次調査

1. 調査要項

遺跡名	今泉遺跡 (宮城県遺跡登録番号01235)
調査地点	仙台市若林区今泉2丁目84-3
調査期間	令和2年6月2日 ～令和2年6月3日
調査対象面積	61.2 m ²
調査面積	15.0 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主査 近藤勇亮 主事 柳澤 楓



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	集落跡、城館跡、包含地	自然堤防	縄文～近世
2	高田B遺跡	集落跡、建物跡、河川跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
3	高田A遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代

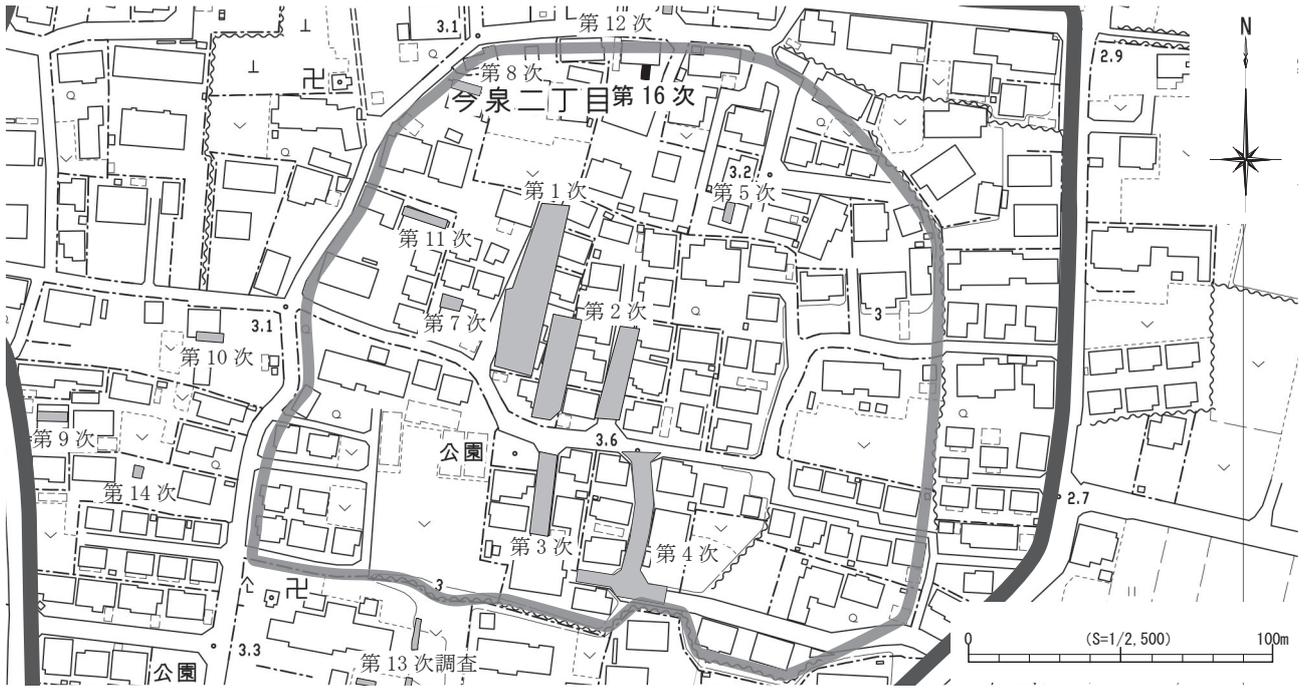
第14図 今泉遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和2年5月11日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年5月15日付R2 教生文第101-58号で通知）に基づき実施した。

対象地内に東西3.0m、南北5.0mの調査区を設定し、重機により盛土を除去し、基本層I層上面（GL-0.8～0.9m）で遺構検出作業を行った。調査区の西半部は攪乱が確認され、重機により掘削を行ったが、GL-1.5mまで攪乱が確認できたため、これ以上の掘削は行わなかった。東側の基本層が残る範囲で検出作業を行い、基本層I層上面で溝跡を2条確認した。

遺構の記録は、調査区平面図（S=1/40）および遺構断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い調査を終了した。

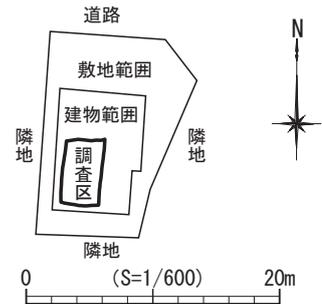


第15図 第16次調査区位置図

3. 基本層序

厚さ約0.9mの盛土の下に基本層を3層確認した。遺構検出面までの深さは90cmである。

- I 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を多く含み、マンガング粒、暗褐色粘土ブロックを少量含む。層厚30～40cm。遺構検出面である。
- II 層：10YR6/2 灰黄褐色砂。酸化鉄を含む。層厚約20cm。
- III 層：10YR6/6 明黄褐色砂。灰白色砂が混じる。酸化鉄を少量含む。



第16図 第16次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

遺構は溝跡が2条検出された。遺物は各遺構から須恵器、土師器、陶器、攪乱から土師器、磁器が出土した。

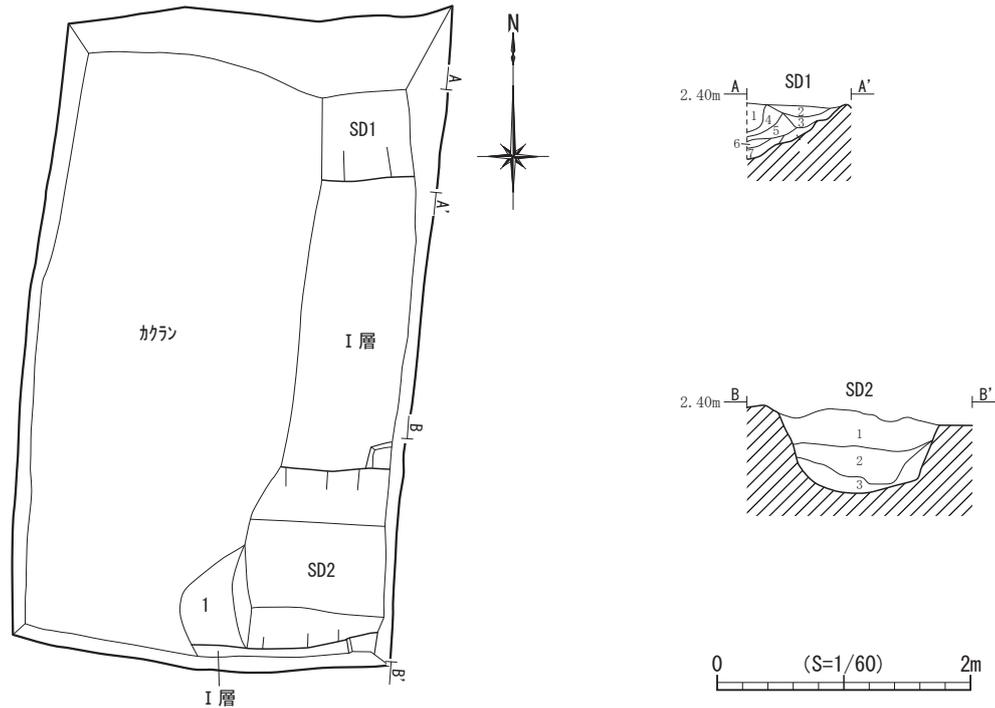
SD1 溝跡 (第17図)

調査区北東隅で溝の南辺が検出された。東西方向の溝跡で、西側部分は攪乱により削平されている。検出長は約0.7mで、調査区外へ延びる。幅は約0.7m以上、深さは約0.4m以上である。堆積土は8層確認された。遺物は土師器、陶器が出土した。土師器は甕等の破片が3点、陶器は大堀相馬産の甕が1点出土したが、いずれも図化はできなかった。

SD2 溝跡 (第17図)

調査区南東隅で検出された東西方向の溝跡で、本調査区外へ延びる。西側部分は攪乱により削平されている。検出長約1.6m、幅約1.4m、深さ約65cmである。断面形状は逆台形を呈し、堆積土は3層確認した。

遺物は須恵器、土師器が出土した。須恵器は坯の底部が1点出土しており、回転糸切痕が確認できる。土師器は坯やロクロ土師器の甕の破片等が21点出土したが、いずれも図化できなかった。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	基本層 I b 層ブロックを含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	下部に植物遺体を含む。酸化鉄含む。
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。10YR2/1 黒色粘土を層状に含む。
	5	10YR2/2 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄を含む。
	6	10YR2/1 黒色	粘土	植物遺体を多く含む。
	7	10YR1.7/1 黒色	粘土	植物遺体を多く含む。
	8	10YR3/1 黒褐色	粘土	基本層 II 層が混じる。植物遺体を含む。
SD2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	基本層 I b 層ブロックを含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	下部に植物遺体を含む。酸化鉄含む。
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄含む。

第17図 第16次調査区平面・断面図

5. まとめ

調査地点は今泉遺跡のほぼ中央部に位置する。これまでの調査では、堀跡や区画を示すと考えられる溝跡が多く確認されており、今回の調査地点は外堀の推定ラインに近いことから、その検出の可能性が考えられた。

調査地周辺で行われた過去の調査では、想定よりも内側で幅 4.6 ~ 4.8m の溝跡が確認されており、その溝跡は北西部の外堀跡である可能性が高い(第8次調査・SD5 溝跡)。また、北側では想定よりさらに北側で幅約 5.8 ~ 6.0m の東西方向に延びる溝跡(第12次・SD1 溝跡)が検出されており、その規模から堀跡であると考えられる。また12次調査の結果から、曲輪の北側に別の区画が存在した可能性が指摘されている。

調査では、北東隅と南東隅でそれぞれ東西方向に延びる溝跡を2条確認した。どちらの溝跡もこれまでの調査で確認されている、堀跡や区画の溝跡であると考えられる。特に SD1 溝跡は、位置や方向等から外堀の一部の可能性がある。

参考文献

仙台市教育委員会 2011 『法領塚古墳他』仙台市文化財調査報告書第393集(8次)
 仙台市教育委員会 2016 『荒井南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第446集(12次)



第18図 今泉遺跡 検出堀跡位置図



1. 遺構検出状況（北西から）



2. SD1 溝跡断面（東壁）



3. 完掘状況（北西から）



4. SD2 溝跡掘削深度（東壁）

写真図版12 今泉遺跡第16次調査

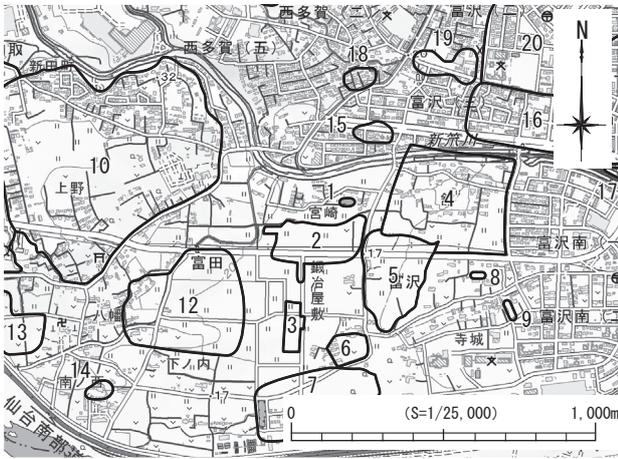
第4章 宮崎遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

宮崎遺跡は仙台市太白区富沢字宮崎に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約1.1kmに位置し、名取川の支流の笹川によって形成された標高約14～18mの自然堤防上に立地する。

宮崎遺跡は富沢駅西土地区画整理事業に伴い平成26年度に実施された試掘調査の際に当該区域の試掘調査区から土師器片、須恵器片が出土したこと、調査区壁断面の状況から、竪穴住居跡の検出が想定されたため、遺跡として新規登録された。平成27年度に道路部分を対象として行われた本発掘調査では、竪穴遺構1基、土坑1基、小溝状遺構群4群、ピット16基が検出された。出土遺物から竪穴遺構は9世紀中頃～9世紀後半の時期であると考えられる。

宮崎遺跡の周囲における同時期の遺構遺物が検出された遺跡としては、南側約150mに位置する鍛冶屋敷A遺跡<2>をあげることができる。平成25年に行われた調査で検出された竪穴住居跡からは「謹解 申請稻事…」等の文字が刻まれた凝灰岩製の砥石が出土している。また他の調査区からも竪穴住居跡が検出されているが、出土遺物や灰白色火山灰が一部の遺構で堆積していたことから10世紀前半頃に比定される。またそれ以外にも京ノ中遺跡<3>や富沢館跡<4>、鍛冶屋敷前遺跡<5>などでも9世紀から10世紀前半頃の竪穴住居跡を中心とした遺構および遺物が出土している。一部の竪穴住居跡からは炉跡が検出されており、遺物も羽口や砥石に加え鉄滓などの鍛冶に係る遺物が比較的多く出土している。またその一方で遺構は重複するほどの重なりは見せておらず、比較的広範囲に遺構が散在していた様子が見える。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	宮崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
2	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～平安
3	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
4	富沢館跡	城館跡、集落跡	自然堤防	縄文、平安～近世
5	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
6	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防、後背湿地	縄文、古代～近世
7	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
8	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文、古代～平安
11	山田条里遺跡	水田跡、屋敷跡	段丘、自然堤防	縄文、古代～平安、近世
12	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安
13	船渡前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～弥生、古代～平安
14	富田南西遺跡	散布地	自然堤防	古代～平安
15	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
16	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
17	下ノ内遺跡	集落跡、墓、畑跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
18	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文
19	富沢清水遺跡	散布地	宅地、畑	奈良、平安
20	富沢遺跡	水田跡、包含地	後背湿地	旧石器～近世

第19図 宮崎遺跡と周辺の遺跡

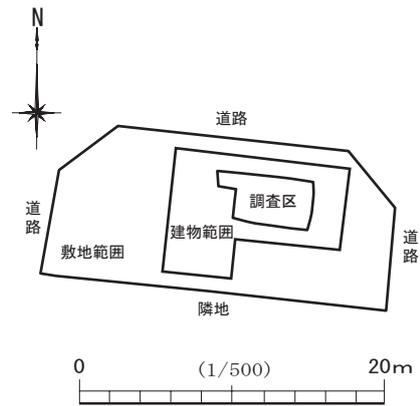
第2節 第2次調査

1. 調査要項

遺跡名	宮崎遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01576)	調査面積	15.0 m ²
調査地点	仙台市太白区富沢駅西土地区画整理事業地内 14B-51L	調査原因	個人住宅建築工事
調査期間	令和2年9月15日～16日	調査主体	仙台市教育委員会
調査対象面積	79.29 m ²	調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
		担当職員	主任 及川謙作 主事 柳澤 楓



第20図 第2次調査区位置図



第21図 第2次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和2年7月13日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年7月16日付R2教生文第101-139号で通知）に基づき実施した。

調査地点は第1次調査区の南側に隣接する。調査は対象地内に、南北3.0m×東西5.0mの調査区を設定し、行った。重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去し、Ⅲ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、竪穴遺構1基を確認し、堆積土からは土師器片が出土した。

遺構の記録は、調査区平面図および調査区北壁土層断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、厚さ約65cmの盛土の下に、基本層を大別で5層、細別で7層確認した。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは1.05mである。

I a 層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。酸化鉄を含む。ややグライ化。旧耕作土。層厚約12～20cm。

I b 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化粒（φ5mm）を少量含む。I a 層との境に酸化鉄が集積する。マンガンを少量含む。層厚は約8～12cmである。

I c 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化粒（φ5mm）を少量含む。酸化鉄、マンガンを含む。層厚約0～10cm。

II 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。10YR4/1 褐灰色粘土ブロックを少量含む。一部灰白色火山灰を含む。マンガンを多く含む。層厚は約10～22cmである。

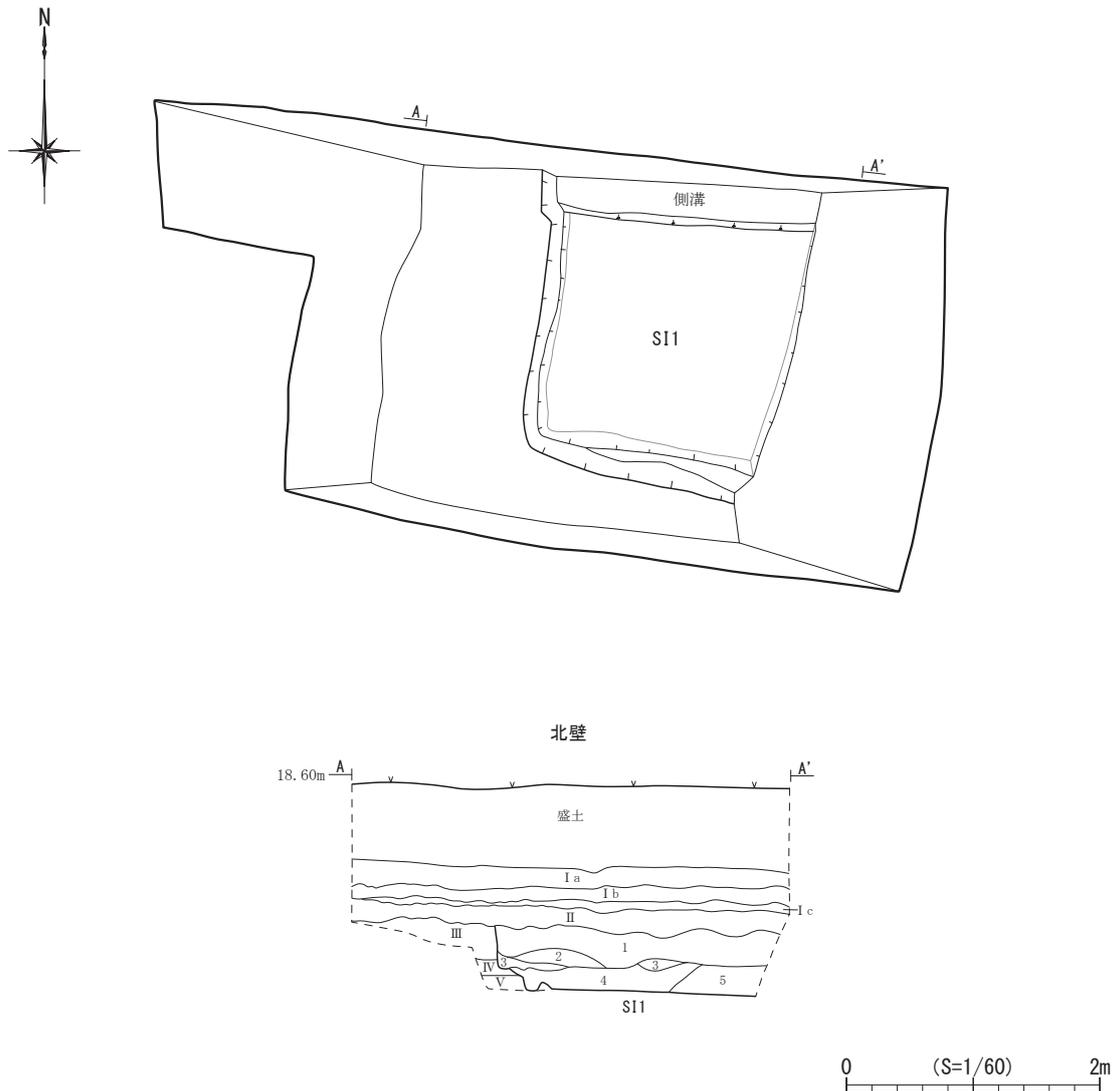
III 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。マンガンを少量含む。10YR4/1 褐灰色粘土ブロックを少量含む。細砂を含む。層厚は約26cmである。今回の調査における遺構検出面である。

IV 層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。炭化粒をわずかに含む。層厚約12cmである。

V 層：10YR4/4 褐色シルト。暗褐色粘土ブロックを少量含む。細砂を含む。層厚は不明である。

4. 発見遺構と出土遺物

検出遺構は、竪穴遺構1基である。遺物は、基本層および遺構から土師器が出土した。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
S11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	堆積土
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
	5	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	
				炭化粒少量。10YR4/1 褐灰色粘土ブロックを少量含む。基本層Ⅲ層に類似するが、粘性が強い。
				10YR4/2 灰黄褐色粘土を含む。
				10YR4/1 褐灰色粘土を少量含む。
				10YR4/1 褐灰色粘土を少量含む。
				10YR4/1 褐灰色粘土を少量含む。炭化粒わずかに含む。4層に似るが、やや暗い色調で、しまりもよい。

第22図 第2次調査区平面・断面図

(1) 竪穴遺構

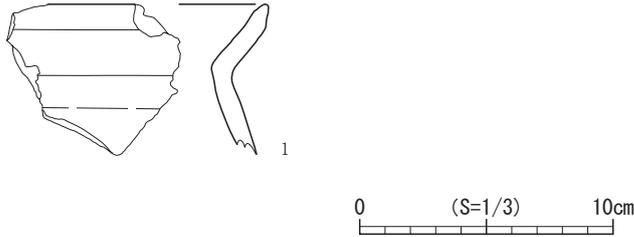
S11 竪穴遺構

調査区北東隅で遺構の南・西辺が確認された。南・西辺の部分的な検出のため、全体の平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。検出した規模は南北約2.2m、東西約2.0mで、調査区外に広がる。

堆積土は5層確認された。1～3層が堆積土で、4～5層が掘方埋土である。

壁面はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は最大で52cmを測る。床面は概ね平坦であり、掘方埋土である4・5層を床面としている。その他の施設は確認されなかった。

堆積土中から土師器片が出土しているが、いずれも細片であるために図化はしなかった。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-1	-	II	土師器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	14-5-1

第23図 第2次調査出土遺物

(2) 出土遺物

基本層中から土師器片が出土しており、その内の甕を1点図化した。D-1 (第23図1) は内外面ともロクロナデ調整が確認されており、また器形などから9世紀代以降のものであると推定される。

5. まとめ

今回の調査地点は宮崎遺跡の南側隣接地に該当する。今回の試掘調査の結果堅穴遺構が1基検出され、遺物もロクロ調整が施された土師器の甕などが出土したことから、当該地を含めた遺跡南側まで範囲拡大を行った。

検出された遺構は堅穴遺構1基である。出土遺物に乏しく正確な年代は不明である。周溝や柱穴など付随する遺構も確認されなかったため、住居跡ではなく、堅穴遺構とした。なお、隣接する第1次調査区でも同様の遺構が検出されていることから、年代も同じように、9世紀前半以降であると推定される。同時代の遺構については第1節の中でも触れたように鍛冶屋敷A遺跡や京ノ中遺跡、鍛冶屋敷前遺跡、富沢館跡、上野遺跡などでも確認されており、今回検出された堅穴遺構は、これら周辺の調査区で検出されている堅穴住居跡等を中心に構成された集落の一部であると考えられる。

引用・参考文献

仙台市教育委員会 2000 『鍛冶屋敷A遺跡・鍛冶屋敷前遺跡』 仙台市文化財調査報告書第245集
 仙台市教育委員会 2010 『上野遺跡 第6・7次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第245集
 仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第466集
 仙台市教育委員会 2019 『今市遺跡ほか 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第476集



1. S11 堅穴遺構検出状況 (南から)

2. S11 堅穴遺構検出状況 (西から)

写真図版 13 宮崎遺跡第2次調査 (1)



1. SI1 竖穴遺構床面検出状況（南西から）



2. SI1 掘方完掘状況（東から）



3. 調査区北壁土層断面（南から）



4. 作業状況（南東から）



5. 出土遺物

第5章 富沢館跡の調査

第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笹川によって形成された標高約14～18mの自然堤防上に立地する。

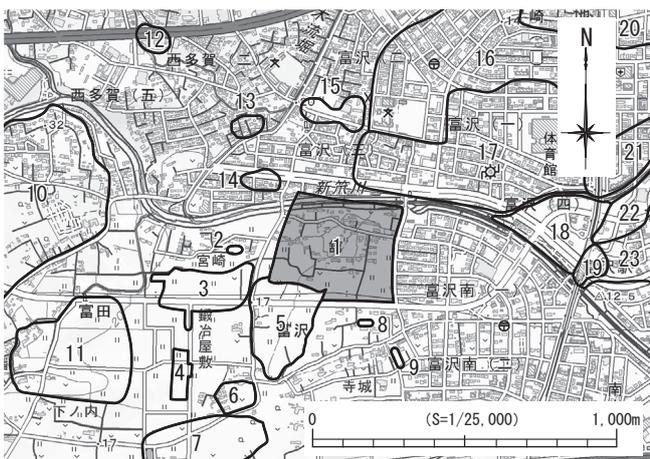
縄文時代では後期中葉の宝ヶ峰式の時期を主体として堅穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う堅穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鉄滓が多数出土した堅穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹解 申請稻事 合□□」「大田部」などと刻書された砥石が出土している（仙台市教育委員会 2018）。

中世になるとこの地域は国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏家臣の富沢伊賀守が居住したと伝わる。

平成25年度から始まった土地区画整理事業に伴い、館跡の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には1～4条の堀跡が巡らされていたことが判明している。また主郭部の東側には出入りに位置したと考えられる門跡が検出されている他、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられる。また2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した（仙台市教育委員会 2018）。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用したと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡、集落跡	自然堤防	縄文、平安～近世
2	宮崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
3	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～平安
4	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
5	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
6	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防、後背湿地	縄文、古代～近世
7	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
8	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文、古代～平安
11	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安
12	西台竊跡	竊跡	段丘	奈良、平安
13	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文
14	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
15	富沢清水遺跡	散布地	宅地、畑	奈良、平安
16	富沢遺跡	水田跡、包含地	後背湿地	旧石器～近世
17	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
18	下ノ内遺跡	集落跡、壘、畑跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
19	伊古田遺跡	包含地	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安
20	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古代、近世
21	下ノ内浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安
22	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生～平安
23	大野田古墳群	古墳群地	自然堤防	古墳～平安

第24図 富沢館跡と周辺の遺跡

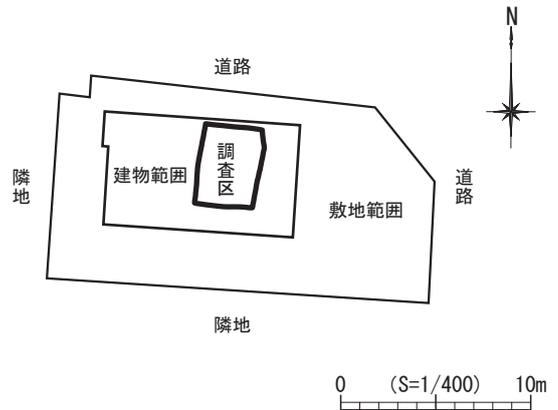


第25図 第19次調査区位置図

第2節 第19次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢字館 31-2、水の各一部
調査期間	令和2年7月7日～令和2年7月8日
調査対象面積	59.76 m ²
調査面積	12.0 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主任 小浦真彦 主事 柳澤 楓



第26図 第19次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和2年6月22日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年6月25日付 R2 教生文第101-114号で通知）に基づき実施した。

対象地内に東西3.0m、南北4.0mの調査区を設定し、重機により盛土及び基本層Ⅰ～Ⅳ層を除去後、Ⅴ層上面（GL-1.1～1.2m）で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡2条、ピット1基を確認した。

遺構の記録は、調査区平面図（S=1/30）および西壁断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い調査を終了した。

3. 基本層序

厚さ約0.6mの盛土の下に基本層を5層、細別で6層確認した。

Ⅰ層：2.5Y3/2 黒褐色シルト。炭化物を含む。ややグライ化している。旧耕作土と考えられる。層厚は約12cm

である。

II a 層：10YR4/6 褐色シルト。I 層ブロックを含む。層厚は約 22 cm である。

II b 層：10YR4/6 褐色シルト。I 層ブロックを含む。III 層との境に黒色粘土を帯状に含む。炭化物、酸化鉄を少量含む。層厚は約 6～22 cm である。

III 層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。炭化物、酸化鉄を少量含む。層厚は約 6～20 cm である。

IV 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。層厚は約 4～18 cm である。

V 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。酸化鉄を多く含む。

4. 発見遺構と出土遺物

遺構は溝跡 2 条、ピット 1 基が検出された。遺物は基本層および SD2 溝跡から土師器、瓦、陶器が出土した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

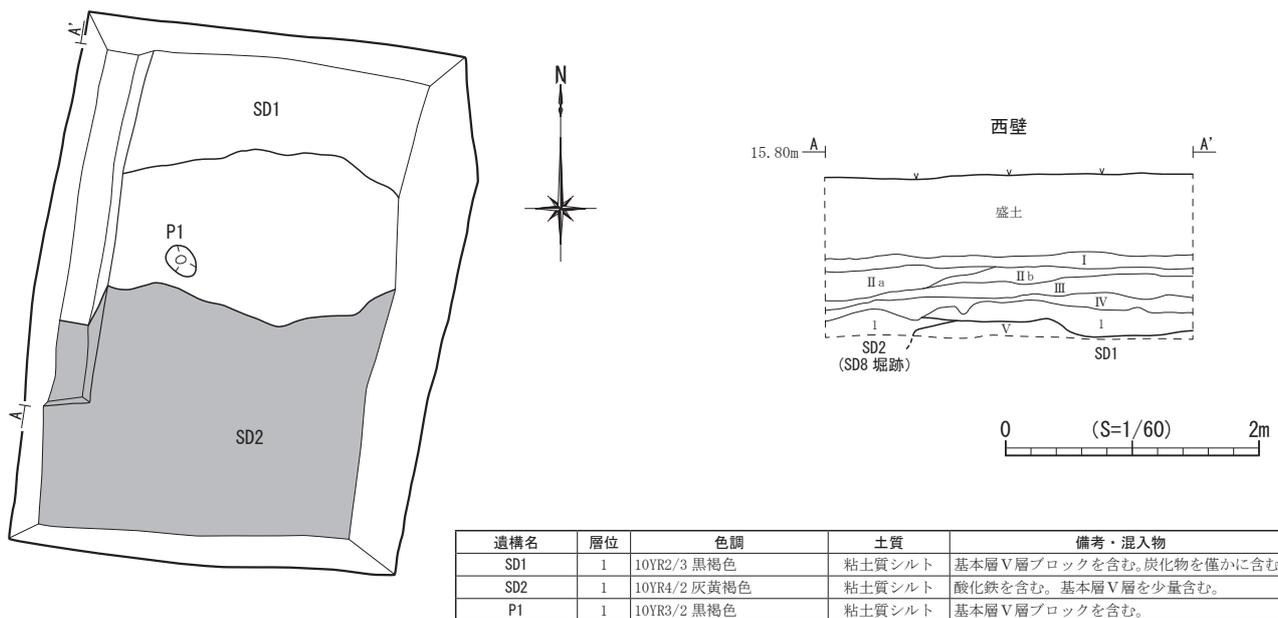
調査区北側で検出された東西方向の溝跡で、SD2 溝跡よりも新しい。検出長は約 2.5m で調査区外に延びる。検出幅は平面で約 80 cm、調査区西壁では約 2.0m で調査区外北側へ広がる。深さは 22 cm で、断面形状は皿形を呈する。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD2 溝跡

調査区南側で検出された東西方向の溝跡で、SD1 溝跡よりも古い。検出長は約 2.5m で調査区外に延びる。検出幅は約 2.0m で調査区外南側へ広がる。精査した深さは 20 cm で断面形状は不明である。堆積土は 1 層確認した。遺物は陶器片が 1 点出土したが図化はできなかった。

(2) ピット

調査区中央で検出された。平面形状は円形で、直径約 24 cm、深さ 24 cm である。堆積土は単層で柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。



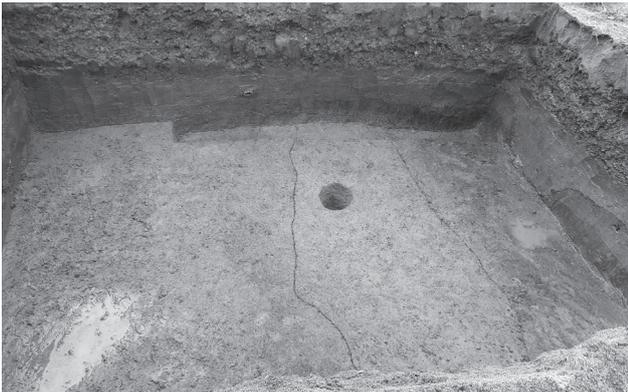
第 27 図 第 19 次調査区平面・断面図

5. まとめ

調査地点は富沢館跡のほぼ中央に位置する。周囲は、土地区画整理事業に伴い発掘調査が行われているが、北に隣接する1区からは、竪穴住居跡や堀跡等が確認されている。今回の調査地点は1区で確認されたSD8堀跡の延長部分の検出が想定されていた。調査では、東西方向に延びる溝跡2条、ピット1基が検出された。そのうち南側で検出されたSD2溝跡は、位置や規模等から平成26年度第4次調査1区のSD8堀跡と同一のものと考えられる。

参考文献

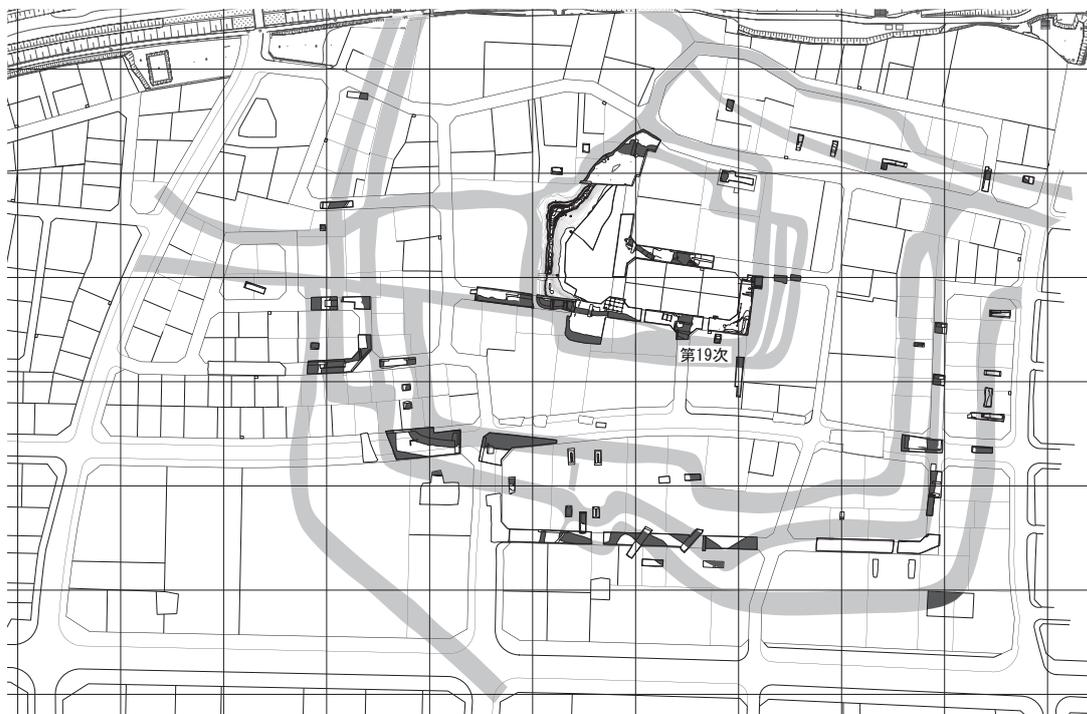
仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第466集



1. SD1・2 溝跡検出状況、P1 完掘状況（東から）

2. SD1・2 溝跡土層断面（西壁）

写真図版 15 富沢館跡第19次調査



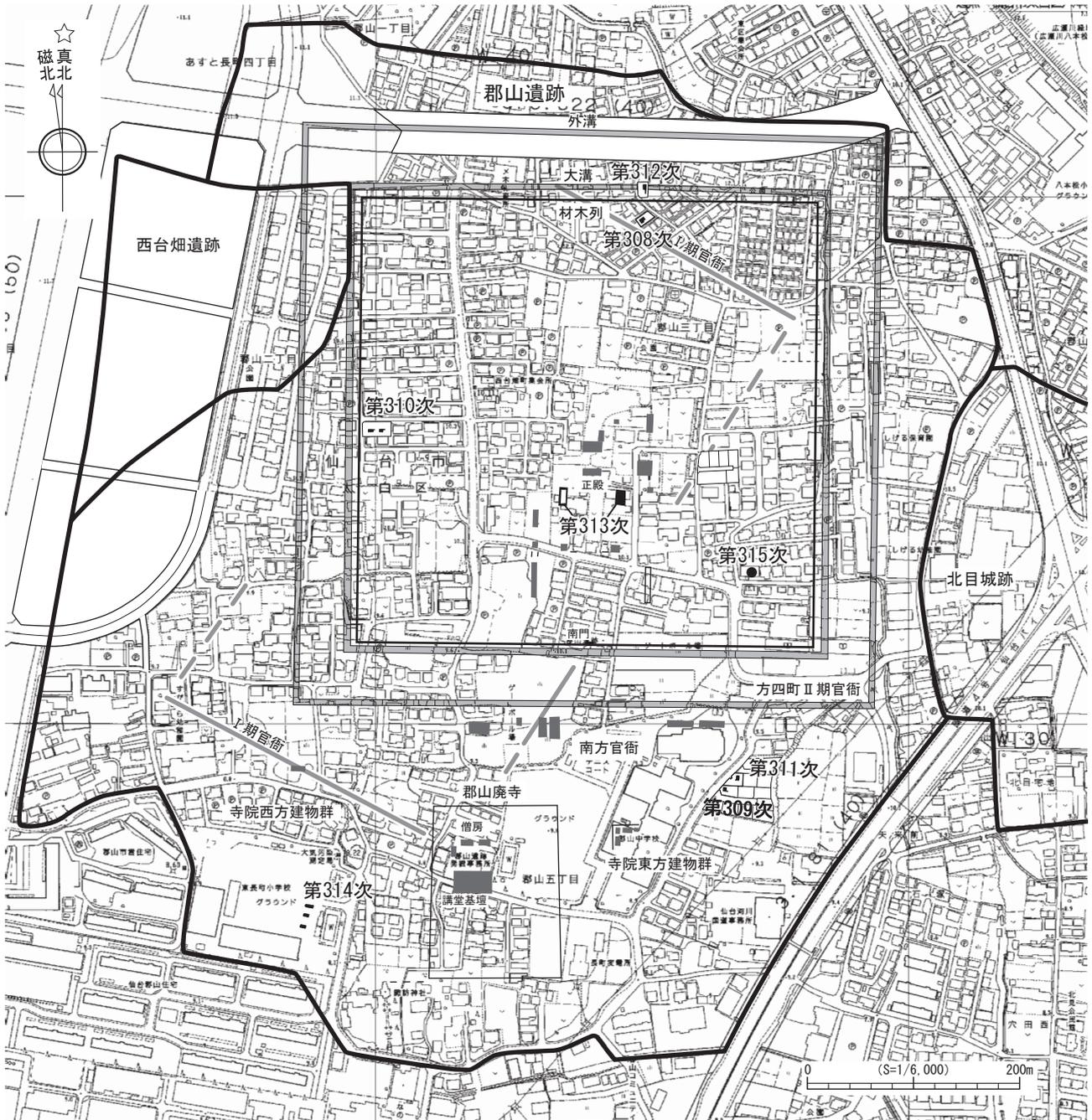
第28図 富沢館跡 検出堀跡位置図

第6章 郡山遺跡の調査

令和2年度末から令和3年度に実施した発掘調査は、第29図の通りである。なお、個人住宅建築に伴う発掘調査の結果および抄録は、仙台市文化財調査報告書第499集『郡山遺跡42』に所収している。

表4 令和3年度 郡山遺跡発掘調査一覧（一部令和2年度実施分を含む）

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第308次	Ⅱ期官衙北部	22.8㎡	令和2年11月4日～12月11日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第309次	郡山遺跡南東部	14㎡	令和3年2月24日～2月25日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第310次	Ⅱ期官衙西部	29㎡	令和3年3月9日～3月10日	個人住宅建築	震災復興民間文化財発掘調査助成事業
郡山遺跡第311次	郡山遺跡南東部	10㎡	令和3年5月24日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第312次	Ⅱ期官衙北辺大溝	18㎡	令和3年7月26日～8月5日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第313次	Ⅱ期官衙中枢部	275㎡	令和3年10月27日～10月28日	遺構確認	範囲確認調査
郡山遺跡第314次	郡山遺跡南西部	63.9㎡	令和3年11月4日～12月11日	校舎増築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡第315次	Ⅱ期官衙南東部	15㎡	令和4年1月17日～1月21日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
陸奥国分寺跡第31次	寺地北西部	130㎡	令和3年2月24日～2月25日	遺構確認	範囲確認調査



第29図 郡山遺跡調査区位置図

第7章 総括

令和3年度に国庫補助対象事業で実施した調査件数は、令和3年12月末で20件（11遺跡）である。本書では令和2年度に行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き6件（4遺跡）の調査について報告した。その成果については以下のようにまとめられる。

1. 南小泉遺跡（第90～92次調査）

第90～92次調査地点は南小泉遺跡の北部に位置する。今回の調査では竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑8基などが検出された。竪穴住居跡からは比較的豊富な遺物が出土し、おおよその年代は7世紀末頃に比定される。また第90・91次調査区で検出されたSD1溝跡とSB1掘立柱建物跡も時期は古代と推測されるが、いずれも出土遺物に乏しいため詳細な時期は不明である。また周囲の調査区からも詳細な時期は不明ながらも類似した規模の柱穴で構成された掘立柱建物跡が検出されている。なお、周囲の調査区からは7世紀後葉から9世紀の時期の竪穴住居跡も検出されているが、主体となるのは7世紀後葉から8世紀前半頃のものである。今回第91・92次調査区で検出された竪穴住居跡は、これら周囲の調査区でも検出されている竪穴住居跡等で構成された集落の一部と考えられ、今回の調査では集落の広がりをもさらに確認することができた。また第92次調査区で検出された土坑の一部も竪穴住居跡の可能性がある。

第92次調査区で検出されたSK1～5・8土坑は検出面から近世の遺構であると推測され、このうちSK3土坑からは堤焼の大甕が出土しており、これは器形の類似例から幕末頃と推測される。器形の類似性から幕末頃に比定することが可能で、甕を埋めた一連の遺構群であったと考えられる。

2. 今泉遺跡（第16次調査）

今回の調査地点は遺跡中心部のやや北側に位置する。今回の調査では溝跡2条を検出した。遺物は、土師器、陶器、磁器の破片が出土している。どちらの溝跡もこれまでの調査で確認されている堀跡や館跡の内部の区画であると考えられる。

3. 宮崎遺跡（第2次調査）

今回の調査地点は宮崎遺跡の南側隣接地に位置する。遺跡の隣接地であるため今回は当初試掘調査として行ったが、調査の結果、竪穴遺構が1基検出され、遺物もロクロ調整が施された土師器の甕などが出土したことから、当該地を含めた遺跡南側まで範囲拡大を行った。

検出された遺構は竪穴遺構1基である。出土遺物に乏しく正確な年代は不明である。周溝や柱穴など付随する遺構も確認されなかったが、隣接する第1次調査区で検出された竪穴遺構とも類似することから、同様の年代、9世紀前半以降の年代であると推定される。同時代の遺構については第1節の中でも触れたように鍛冶屋敷A遺跡や京ノ中遺跡、鍛冶屋敷前遺跡、富沢館跡、上野遺跡などでも確認されており、今回検出された竪穴遺構は、これら周囲の調査区で検出されている竪穴住居跡等を中心に構成された集落の一部であるものと考えられる。

4. 富沢館跡（第 19 次調査）

今回の調査地点は遺跡のほぼ中央部に位置する。調査区からは溝跡 2 条とピット 1 基を検出した。遺物は土師器、陶器、瓦の破片などが出土している。北に隣接する道路範囲については平成 26 ～ 28 年度にかけて土地区画整理事業に伴い調査が行われており（第 4 次調査）、竪穴住居跡や堀跡等が確認されている。今回の調査区南側で検出された SD2 溝跡は、位置や規模から第 4 次調査で確認された SD8 堀跡と同一の遺構であると考えられる。

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん							
書名	仙台平野の遺跡群 32							
副書名	令和3年度 個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第497集							
編著者名	木村 恒 及川謙作 柳澤 楓 妹尾一樹 斎野裕彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5-12 仙台市役所 上杉分庁舎10階 TEL:022-214-8894							
発行年月日	2022年4月7日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
要約								
みなみこいづみいせき 南小泉遺跡 (第90次)	宮城県仙台市若林区一本杉町	04103	01021	38° 14' 34"	140° 54' 24"	20201006 ~ 20201014	16.43 ㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世		溝跡、掘立柱建物跡、ピット		土師器、須恵器		
	検出された溝跡と掘立柱建物跡はいずれも第91・92次調査区から検出された竪穴住居跡よりも新しく古代と推定されるが、詳細な時期は不明である。							
みなみこいづみいせき 南小泉遺跡 (第91次)	宮城県仙台市若林区一本杉町	04103	01021	38° 14' 34"	140° 54' 24"	20200929 ~ 20201006	16.50 ㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世		溝跡、竪穴住居跡、ピット		土師器、須恵器		
	竪穴住居跡の一部が検出された。時期は7世紀末頃に比定されるが、床面も2時期の変遷が確認され、検出面から当初の床面である掘方底面までの深さも50cm以上あり、支柱穴の規模も大型であったことから、周囲で見つかった集落の中でも規模の大きな中心的な住居であった可能性がある。							
みなみこいづみいせき 南小泉遺跡 (第92次)	宮城県仙台市若林区一本杉町	04103	01021	38° 14' 34"	140° 54' 24"	20200928 ~ 20201014	20.22 ㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世		竪穴住居跡、土坑、ピット		土師器、須恵器、土製品、陶器		
	竪穴住居跡が3軒検出されたが、いずれも時期は7世紀末頃に比定される。また土坑の一部には埴焼の大甕が据えられており、器形の特徴などから幕末頃に比定される。							
いまいづみいせき 今泉遺跡 (第16次)	宮城県仙台市若林区今泉2丁目	04103	01235	38° 12' 40"	140° 55' 41"	20200602 ~ 20200603	10.0 ㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落跡、城館跡、包含地	縄文～近世		溝跡		土師器、土製品		
	溝跡を2条確認した。城館の中心部を囲む堀の一部と考えられる。							
みやざきいせき 宮崎遺跡 (第2次)	宮城県仙台市富沢駅西土地区画整理事業地内	04104	01576	38° 12' 52"	140° 51' 27"	20200915 ~ 20200916	15.0 ㎡	記録保存 (個人住宅建築)
	集落跡	平安		竪穴遺構		土師器、土製品		
	竪穴遺構の一部が検出されたが、詳細な時期は不明である。北側に隣接する第1次調査区からは類似した特徴をもつ竪穴遺構が検出されており、時期的にも近いものであると推測される。							

とみぞわたてあと 富沢館跡 (第19次)	宮城県仙台市太白区 富沢字館	04104	01246	38° 12' 51"	140° 51' 42"	20200707 ~ 20200708	12.0 m ²	記録保存 (個人住宅建築)
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世		溝跡、ピット		遺物なし		
	溝跡2条、ピット1基を確認した。城館の主郭部東部を構成する堀跡と考えられる。							

仙台市文化財調査報告書第 497 集

仙台平野の遺跡群 32

令和 3 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

2022 年 4 月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022 (231) 2245(代)
